

設立25周年記念事業 平成11年度出土遺物展

【フォーラム】

「今、古代史がおもしろい」

－出土文字からさぐる房総の古代－

目次

1. はじめに
 - (1) 出土遺物展について
 - (2) フォーラムの開催について
 - (3) 開催挨拶
 - (4) フォーラム参加者
2. 基調講演及び事例報告
 - (1) 基調講演
 - (2) 事例報告
3. フォーラム
4. 参考文献

1. はじめに

(1) 出土遺物展について

財団法人千葉県文化財センターでは、広報・普及事業の一環として、当センターで保管・収蔵している資料を一般に公開し、当センターの業務内容の理解と埋蔵文化財に対する認識を深めてもらうことを目的に、出土遺物展の開催を行ってきた。



第1回からの出土遺物展のパンフレット及び図録

第1回の出土遺物展は、平成4年11月22日から12月6日まで当センター本部の展示室において、これまで発掘調査を行った県内の代表的な遺跡をとりあげ、旧石器時代から奈良・平安時代までの出土遺物を一堂に集めて特別展示「最近出土の考古資料」として開催し

た。

第2回以降の出土遺物展は、当センターが開発事業に先行して発掘調査した遺跡のうち、調査面積が大規模で多くの調査成果が得られている遺跡の出土遺物に焦点を当て、地域に遺された歴史を出土遺物の公開展示をとおして知ってもらおうと、長期計画を策定し開催を開始した。

第2回の出土遺物展は、平成5年11月13日から11月21日まで、印西市を中心とする千葉ニュータウン開発地域の調査成果に基づいて、「知っていますか？もう一つの千葉ニュータウン」と題した展示会を印西市中央駅前センター2階会議室において開催した。第3回は、当センターの設立20周年に当たり、記念出土遺物展として、20年間にわたる調査で出土した遺物によって構成した「掘り起こされた房総の歴史」と題し、平成6年11月12日から平成7年2月9日まで成田市中央公民館・松戸市立博物館・県立房総風土記の丘の3会場を巡回して開催した。第4回は、平成7年8月19日から27日まで、市原市の福増浄水場建設に伴う調査成果に基づいて「縄文の世界 武士遺跡展」と題し、市原市五井会館で開催した。第5回は、4回以降隔年の開催となったため、平成9年度に開催し、8月8日から21日まで佐倉市の佐倉第三工業団地開発に伴う調査成果に基づいて「石の時代今むかしー佐倉第三工業団地内遺跡群ー」と題し、佐倉市臼井公民館で開催した。

平成5年度から開催してきた出土遺物展も、第6回をもって長期計画の最終年度を迎えることとなった。今回の出土遺物展は、東関東自動車道の建設に伴って昭和58・59年に発掘調査を実施して多量の墨書土器を出土した、奈良から平安時代の集落跡である吉原三王遺跡の墨書土器を中心とする展示が計画されていた。吉原三王遺跡の調査以降、千葉県内の奈良・平安時代の集落遺跡から出土する墨書土器は、全国的に見ても出土量と内容が豊富であることが次第にわかり、房総の古代社会を解明する上で重要な資料であることが指摘されるようになった。

平成11年度は当センターの設立25周年に当たるため、記念事業として今までの展示会を拡大して実施するこ

とし、千葉県の主要な墨書土器をはじめとする出土文字資料を一堂に集めて展示し、房総の古代史を探ろうという試みを企画した。また、併せてフォーラムを開催することとした。

展示は、平成11年10月2日から、柏市にあるさわやかちば県民プラザから順次、県立安房博物館・県立大根根博物館の三館を巡回し、平成12年1月9日を最後に展示を終了した。展示期間中は多くの県民の方々に見学をいただき、のべ6,985人の入場を数えるに至ったことは、地域に根差した出土資料を中心に展示を行った出土遺物展への関心の高かったことを示しているものと思われる。



さわやかちば県民プラザの展示見学風景

(2) フォーラムの開催について

フォーラムは、平成11年度の出土遺物展「今、古代史がおもしろい」－出土文字からさぐる房総の古代－に対応して、平成11年10月17日（日）にさわやかちば県民プラザにおいて、4時間にわたり実施したものである。当日のフォーラム入場者は県内外から170名を越え、盛況のうちに終了することができた。

今回の出土遺物展は墨書土器に関するフォーラムを開催するため事前の準備が大きな課題となった。限られた時間の中で、企画担当の西川主任研究員を事務局として発表者の方々と連絡調整を図りながら、フォーラム開催に至まで都合6回の打ち合わせ会議を実施した。会議ではフォーラムの柱立てから展示資料の選定・図録の構成・ポスターの印刷について検討を行った。十分な検討が加えられたとは言いが、現時点での最新の研究成果を考古学の分野だけではなく、文献史学の分野での研究成果を盛り込んで開催できたことは、墨書土器に対する視点に重要な示唆を与えることにな

ったと思われる。

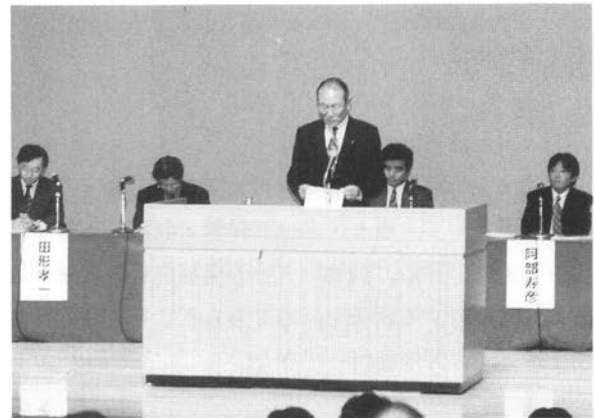
本記録は、フォーラムの基調講演・事例報告及び討論について録音テープに収録したものの原稿を作成し、発表者の方々に添削をいただいてとりまとめたものである。とりまとめるに当たっては、当日の雰囲気伝える必要な要素として言い回しなどは極力手を加えないこととした。

なお、本記録には図録及び当日の追加資料として使用した資料の出典について、今後における墨書土器をはじめとする文字資料の研究に少しでも寄与することができればと考えて、参考文献として掲載した。

(3) 開催挨拶

小林 喬（当文化財センター専務理事）

ただ今、ご紹介いただきました専務理事の小林でございます。



専務理事開催挨拶

本日は、出土遺物展フォーラムのためにお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。

本日のフォーラムは、県文化財センターの設立25周年記念事業として開催いたしました関係から、ごく簡単に私どもの紹介をさせていただき、記念事業のご挨拶とさせていただきます。

私ども財団法人千葉県文化財センターは、千葉県内における埋蔵文化財の発掘調査・研究及び県民の文化財保護思想の普及等を図り、地域文化の充実に寄与することを目的といたしまして、昭和49年に設立されました。

それから早いもので、もう25年の歳月が経過したことになるわけでございますが、この間、道路建設・ニュータウン建設・空港建設等の開発に伴い、数多くの遺跡の発掘調査を行い、その成果を調査報告書として

刊行してまいりました。

また、一方では、これらの調査成果を公開し、普及するための事業といたしまして、発掘した遺跡での現地説明会の実施、遺跡や史跡等を巡る「ウォーク・イン古代」の実施、広報紙『房総の文化財』の発行、展示会の開催等を行ってまいったところでございます。

その他にも、県内各地区の文化財センターや市町村教育委員会等と協力して行う「千葉県遺跡調査発表会」や1年おきに行う「考古資料巡回展」等も行っております。現在開催中の出土遺物展もそういったものの中の一つでございますが、今回は25周年記念事業ということで規模を大きくし、本日の会場となっておりますさわやかちば県民プラザ・県立安房博物館・県立大利根博物館のご協力を得て巡回するかたちで実施していくこととしたものでございます。

今後も役職員一体となって25年の経験と実績をもとに県民の皆様のご要望にお応えできるよう一層の研鑽を重ねてまいる所存でございますので、財団法人千葉県文化財センターを今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

なお、本日のフォーラムは、千葉県内で出土した墨書土器を中心として、出土した文字資料から、房総の古代史をさぐるものでもあります。墨書土器については千葉県が全国的に見ても最も充実した資料を有していると言われておりますので、国立歴史民俗博物館の平川南先生をはじめとする研究者の方々の報告や討議に注目していただきたいと存じます。本日のフォーラムは少し長い時間となりますが、どうぞ最後までご静聴くださるようお願い申し上げます。

簡単ではございますが、開会に当たってのご挨拶といたします。ありがとうございました。

(4) フォーラム参加者

発表者

平川 南 国立歴史民俗博物館教授
栗田則久 市原市埋蔵文化財調査センター所長
阿部寿彦 四街道市教育委員会主任主事
川尻秋生 県立中央博物館上席研究員
笹生 衛 (財)千葉県文化財センター研究員
司会
阪田正一 (財)千葉県文化財センター資料部長
事務局 (企画担当)
西川博孝 (財)千葉県文化財センター主任研究員

2. 基調講演及び事例報告

司会

これからのフォーラムの進行を務めさせていただきます阪田でございます、よろしくお願いいたします。

今日のフォーラムでは基調講演と事例報告について発表をお願いしたいと考えておりますが、今日のフォーラムをお願いいたしました方々につきまして、簡単ですけれどもご紹介をさせていただきたいと思っております。

まず、国立歴史博物館教授の平川南さんです。古代の文献史学の立場で漆紙文書などの出土文字資料を研究されていらっしゃいます。

続きまして、市原市埋蔵文化財調査センター所長の栗田則久さんです。古代の集落遺跡出土の墨書土器を研究されております。

続きまして、千葉県教育庁生涯学習部文化課文化財主事の田形孝一さんです。古代集落の復元に関する研究をされております。

続きまして、四街道市教育委員会社会教育課主任主事の阿部寿彦さんです。墨書土器と香取系神社の関係について研究をされております。

続きまして、千葉県文化財センターの笹生衛さんです。古代の仏教関係遺跡について研究をされております。

最後になりますが、千葉県立中央博物館上席研究員の川尻秋生さんです。古代の文献史学の立場から香取の海に関する研究をされております。

それでは皆様方よろしくお願いいたします。

今日は基調講演を平川さん、事例報告につきましては5名の皆様をお願いしたいと考えております。平川さんには「出土文字資料研究の現状」と題しましてご講演をいただきたいと考えております。なお、資料といたしましては、本日受付で配付いたしました出土遺物展の図録、それからB4判で7枚(P8~11)、A3判で4枚(P25~27)のコピー資料がありますので、ご覧いただきながらお話の方を聞いていただければと思います。それでは早速ですが平川さんよろしくお願いいたします。

(1) 基調講演

平川

国立歴史民俗博物館の平川です、よろしくお願いいたします。与えられました題目は、墨書土器、いわゆる墨で文字が書かれたものが、近年日本列島各地で出土し



平川南氏基調講演

ております。その土器に書かれたわずかな文字が古代史を研究する上で、あるいは古代社会を復原する上でどういう資料となり得るであろうかというのが、この墨書土器の研究というものの大きな目的です。木簡とか、紙に書かれた漆紙文書と違って、この資料だけは古代の遺跡を掘りますと、どこからでも出てきます。今では北海道から鹿児島まで、この資料がたくさん出ております。特にこの千葉県では、今度出ました『県史』の古代史編には、一冊の本として、一万点近い文字資料を収めているということです。この後で、皆さんとフォーラムをするときに、なぜ千葉県にたくさんの墨書土器があるのかを討論したいと思います。

この墨書土器につきましては、丁度今から15年ほど前に、私が以前仕事をしておりました東北からこちらの佐倉市にあります歴博に移って参りまして、最初に行ったこのような講演で、聞いておられた方から、なぜ土器に字を書くのかという質問をされたことを鮮明に覚えております。その質問こそが、この15年間の私にとって一つの研究課題でした。つまり墨書土器はなぜ土器に文字を書くかということが研究の目的であり、そこから古代社会の中のどこを描いたらよいかはその次の目的になります。そういった点で、15年前に質問をしていただいた県民の方に大変私は感謝をしております。非常に目標がはっきりと定まったわけです。つまり何年かけてでも土器に文字を書く目的を明らかにしようということで研究を続けて参りました。

今日はこのような私の考えをお話したいと思います。資料はNo. 1からNo. 7 (P 8~11) まであります。

私は以前『漆紙文書の研究』という本を、吉川弘文館から出版いたしました。二番目の出土文字資料ということで『墨書土器の研究』という本を同じ体裁で出すことにいたしまして、その原稿を先日やっを入れ

たところ。墨書土器についてその始まりから盛んになった時、そして最後に墨書土器がなぜ消えてしまうのか、というところまで見通して書いたものです。来春には刊行されると思いますのでその節はよろしくお願いします。

まず最初に、なぜ土器に墨で文字を書いたかを知るためには日本列島における文字の始まり、を知らなければなりません。もともと日本には言語はあってもそれをうつす文字というものが無かったわけですから、中国から漢字を取り入れて、それで表記したということです。したがって中国とは違う文字の歴史を持っているはず。日本列島で文字を必要としたのは中国と外交関係を結んだときからであろうと思われ。外交文書をやり取りする必要があるわけですので、おそらく紀元前後ぐらいから文字による外交文書が作成されたのでしょう。書き手は中国から人を招いたり、卑弥呼の側近にそういう人がいたのかもしれませんが、そういう人々が書いた外交文書があったであろうと思われ。こういっただけではなかなか遺りづらいものなので、今後も発見することは難しいものと思われ。そうなると、一体日本列島において政治の中でいつから文字を使い始めたかということが次の問題になるかと思いますが、これが幸いなことに5世紀という段階の証拠となるものを手にすることができたのです。今から十数年前に千葉県の市原市で見つかりました「王賜」銘鉄剣というのをご存じだと思います。会場の入り口にこの鉄剣の複製が展示されておりますので後で見ていただければと思いますが、これには王賜という言葉で始まり、推定で12文字ほどの簡単な文章が書かれていました。これは丁度そのころは中国によって日本の王権が正式に認められたときです。国内の政治において畿内の政権が地方を支配するという形が具体的に中国から認められ、王という意識を全面に出した時期であり、5世紀半ばの倭の五王の時代に初めて国内政治に文字を使う、つまり王権から地方の豪族に対して文字を印して剣を賜うという行為が始まった。おそらく国内において初めて文字が内政の上で使われた最初であると思われ。それを受けた地方の豪族たちは、大和の政権に対して奉仕する、あるいは大王の周辺を警護するという役割を負うことによって、今度は王権とのつながりを誇示することによって、自らの地方における支配権力のいわば裏づけを得ることができるようになったわけです。そのために、王権とのつながりを連綿と文字に印したのである。そ

れが埼玉県で今から20年前に出土し、戦後の古代史上、最大の発見といわれました稲荷山鉄剣の銘文、そして熊本県の江田船山古墳の大刀の銘文ということになるかと思えます。そこから、地方において文字が政治の中で大きな役割を果たした。そのころから徐々に文書によって政治を行い、人々を支配するという形が出来上がっていったのではないかと考えています。

これまでは、日本に律令というものが中国から取り入れられて、それをきっかけにして、文書による行政が本格化したといわれていましたが、その開始時期を私はもっと早いと最近では考えるようになっております。昨年徳島市の観音寺という遺跡で7世紀前半の木簡が見つかり、また、長野県や徳島県をはじめとして、各地で7世紀代の中頃の、文字による行政支配を示すようないろいろな記録類も木簡という形で非常にたくさん出ておりますので、とても律令以降とは考えられなくなっております。やがて日本列島全体に、文字による支配、文字を使つての記録、文字で命令を行う、あるいは下の者が文字に書いて上申書を提出するというような社会が出来上がってゆき、それが成熟してきたのが7世紀から8世紀だろうというふうに考えられます。そういう動きに連動した形で墨書土器、つまり土器に文字を書くということが次第に行われるようになってきたのではないかと考えております。

かつては、この土器に文字を書いたものが当時の一般の農民の堅穴住居からたくさん出てくるということから、文字の普及のパロメーターになると考えられていました。しかし、出土する墨書土器を見ますと、書かれている文字が大変限られていて、しかもどこの遺跡でも共通した文字が見られるという現象がありました。それが1枚目の資料(P8)の左側にあります長野県吉田川西遺跡で、そこでは「南」とか、「万」、「千」、「吉」などで一番最後の資料を見ますと「財富加」のように三文字を書き連ねたものが出ました。一方、福島県の達中久保遺跡では同じように、「南」、「加」、「千万」、「富」そして「富豊」というように一つの土器に二つの字を書いた土器も見られます。ここに比較してみますと似たような意味の文字が書かれていることがはっきりわかると思えます。さらに石川県の浄水寺という寺跡の9世紀から10世紀にかけての土器には、「富」、「集」とか「吉」を加えた文字がたくさん出ています。ここでは表であらわしたようにほとんど共通した文字が書かれています。このようなことは文字の普及ということではないわけです。次

の2枚目の資料(P9上段)を見ていただくと、今度は文字の種類ではなくて、文字の形ですが、そこには崩した文字が非常にどこでも同じような形で出てきます。文字を習得するためには楷書体、行書体そして草書体へと徐々に崩していくわけですが、そういう書の訓練を経ているわけではなく、草書のような崩した文字をそのまま楷書のごとく書いています。つまり、文字を形で覚えて記すというような資料が鮮やかに出てくるのが図の1です。「得」という字はそのような形で現れているわけです。今日の資料の中でも、たくさん紹介されておられて、一番典型的なのは図録の14ページのところで、後で笹生さんが報告されますが、「甲得」の「甲」の下にありますこの「得」という字は、大網白里町のごく一般的な集落遺跡から出たものですけれども、この「得」の字は「甲」と同じように楷書で書いてありますが、しかしこの字は、明らかに「得」という字の草書体であるわけです。千葉県永吉台遺跡の資料でも同じことが言えます。これはそういう面で文字を形として覚えている、見て覚えている。そのことを示すものが図の3(P9上段)です。須恵器の土器が生乾きのときに竹ペラのようなものでひっかいて書いた場合にはその書き順がわかります。島根県の8世紀の終わりから9世紀の始めごろの資料ですが、この須恵器を作った工人、須恵器づくりの職人さんは「田」という最もポピュラーな、しかも簡単な文字でさえ筆順が違っているという状態がこれでわかると思えます。字を形で見ると覚えると筆順は正しく書けないということになります。また、これまで文字だと思っていたものが実はそれが漢字ではなかったという事例を指摘したものが図の4(P9上段)です。井桁で、これまでこういう字を井戸の「井」というふうに理解して、これが出た遺跡は井戸の祭祀を行ったのだと説明してきたのですが、それにしてもこれがたくさん出過ぎる。しかも、「井」だけで120点も出る遺跡もありまして、それが全部井戸の祭祀かということになります。それを疑問に思ったのは千葉県の柏市の花前遺跡から出ました土器に井桁のようなマークと星のマークのようなものが一緒に書かれたものを見たときです。それは出来上がった土器に鋭い刃物か釘の先のようなものでひっかいて書いたものが出てきて、これはどうやら漢字ではないというふうに考えたわけです。そうしますとそれをどういうふうに解釈したらよいかと言いますと、実は我々の身近な資料で解くことができました。それは伊勢志摩の海女さんが海にも

ぐっていった、岩場に張り付いている貝を剥がし捕る道具である磯鑿の木製の取っ手の部分に井桁のマークのような印を彫り付けている例が伝わっております。また、村境に、村にいろいろな疫病が入ってくるのを防ぐためのお祭りをするときにも板にこういったマークをつけて、しかも呪文である「急々如律令」と書いたものも吊すという民俗事例もあり、そういったことから、これは明らかに魔除けの符号であると思われた。つまり魔除けをするための記号であることが明らかになったわけです。そういうことであればこれは、北海道から鹿児島まで非常なスピードで人々の心を捉えたということが言えるわけで、文字を習得してそれが広がっていったものではないということがわかりました。

図の2（P9上段）の山形県の例ですけれども、「桑」という字があります。桑原さんの「桑」ですが、その「桑」という字を異体字で書きますと、「十」を三つ書いて木を書くような字になりますが、文字を知っている人がそういった異体字を書く、それを見た人が、その字の元の字を知らないためにやがてそれが最後は「立木」というふうに変化をしていくというような、いわば伝言ゲームみたいな形で、知っている人と知らない人が伝え聞いたときの誤りというものが、こういう形で出てきて、当時の社会がそれほど文字を習熟していなかったということの証拠であろうと考えたわけです。

これによって、墨書土器というのは土器に墨で文字が書いてはあるが、それは文字の普及のバロメーターにはならない。がしかし、人々が縄文や弥生の時代から神にいろいろなことをお願いした、あるいは魔除けのいろいろなサインを会得して、それを文字によって示すようになったのは先程も言いましたように、まさに律令の文書行政が始まったことが一つのおおきな前提になっているわけです。

そして、その姿がもう少しはっきりとわかるのが、一体人々は何を土器に書いてお願いをしたのかということで、具体的な資料がNo.3（P9下段）の房総半島一帯に非常に特殊な形で出てきたものです。特に下総国の印旛沼、手賀沼そして霞ヶ浦、北浦など、かつて全部が内海によってつながっていた、「香取の海」によってこの地域に非常に限定されて集中的にこういう資料が見えるということがこれまでの調査結果でわかってきております。その代表的なものを挙げました。「丈部乙刀自女形代」、これは「かたしろ」と読むのか「みのかわり」と読むのかは後に資料が出てきます。

これは八千代市の権現後という遺跡で、村神郷の丈部国依さんという人が甘魚、つまりご馳走という意味で書いているのですが、この土器にご馳走を盛って神様に奉ったという、その行為を丁寧に文字によって記しているということになります。それから目立つのは「国玉神」とか「国神」というふうな神様の名前、また、「竈神」、「罪司」、図の7（P9下段）にありますように富里町の久野高野遺跡出土の、罪の司に進るといような文字も見える。ここでは「どこの」「だれだれが」「なになにの神に」「奉る」、さらにはご馳走をといようなこと、あるいは何々の代わり、身の代わり、だれだれの代わりにという言葉が目立って出てくるということが共通しています。

では当時のそういう世界はどんなことから解いていくことができるのだろうかというのが、No.4（P10上段）のところですね。今回の千葉県文化財センターで作っていただいたポスター、これは大変刺激的なポスターで、どうして地獄の閻魔様がでかでかと登場しているのか、墨書土器はわかるけれども、閻魔様の絵は一体なんでこの土器と関係があるのかというふうに思われた方がおるでしょうが、実はそれが4枚目の資料を見ていただくと、はっきりと理解していただけると思います。これは『日本霊異記』という書物のものですが、こういう話がたくさんついております。閻魔様の使いの鬼が召される人にご馳走をもって迎えられたときに、もし鬼がそのご馳走を食べた場合にはその人を救わなければならないという話です。これは讃岐国の話で山田郡に、布敷臣衣女という人がいて、その人が病気になったので、その流行病の神に対して門の両側にご馳走を盛ってもてなしをしようとした。それを閻魔様の使いである鬼がたまたま食べてしまった。そうしますとその鬼はその恩に報いなければならないということで、代わりの人を連れて行くことになるわけで、それが「同じ姓同じ名の人有りや」という鬼の質問に対して、衣女は「同じ国の鶴垂の郡に同じ姓の衣女有り」と同姓同名の人がいますからその人を連れて行ってもらう、自分は免れようとした話がのっています。このような『日本霊異記』の世界を見ていきますと、先程なぜ村神郷であるとか、最近では同じ八千代市の上谷遺跡からはもっと丁寧なもので下総国印旛郡村神郷丈部某と書いたものが出てきており、今度は国の名前から書いているのです。それはここにありますように、同じ国の同じ郡の同姓同名の人を代わりに連れていくのですから、お願いするほうはできるだけはつき

りと自分の身分と氏名をきちんと報告しておかないと、その恩を引き出そうとするときに実行してもらえなくなるということを考えてなのでしょう。それはどういう世界かというときにまさに閻魔様の地獄の絵を見れば明らかかなように閻魔様がそこに厳めしい顔をしている、その横には墨も硯も筆もあり、そして紙が用意されていて、しかも両側に書記官のような人がでんと控えている。一方は司命神で冥界において戸籍を管理していて戸籍に記載された年齢に達した、つまり、召し出す年齢に達した人を冥界に召喚する係で、また、もう一人は司禄神とってそれを記録する、娑婆にいて人々は良いことをどのくらいやったか、悪いことをどのくらいやったか、その差し引き計算で寿命がカウントされるわけですから、そういうことをすべて記録する神である。人々はそういう世界を心に描きながら土器に丁寧な自分の、国、郡、里、どこのだれがご馳走を奉るということ、あるいは自分が召し出される代わりにこういうご馳走をしているのですよということ、丁寧な書いたものが、今香取の海周辺で見つっている多文字の墨書土器の本物の姿だというふうと考えられます。これも一つの信仰の中で書かれる文字ということになります。ただ、書かれる文字が今申し上げましたように何々の国、何々の郡ということで、これは現実に律令体制に入って戸籍が編纂される公文書によって人々が支配される形が出来上がってから取り入れられたわけです。そこに書かれている「進上」、なにに奉るというのも、当時必ず人々が税金として都に、安房の人であればアワビを「進上」するというのを木簡に丁寧に書いてどここの、だれだれがアワビをいくら「進上」しますと書いているその文面と合致するわけです。

また、当時の地方社会で多く文字を使用したのは郡の役人ですが、郡の役人が里の人間を召し出す時に、この文字を使うわけです。通常の木簡というのは大体20cmから30cm内外です。ところが郡の長官がその里の人間をおそらく広場に集めて、命令を下すときに使う郡符木簡は、後で川尻さんが詳しく述べてくれると思いますが、会場の後ろの方も読めるぐらいに大きな字で示す。つまり大きな字で脅かすことになる。文字というものが身近でない当時の社会で、文字を大きく書いて命令をするときに使う、そして一番使われるのは人々を召す、召喚するというときに使うのです。この召喚状の影響を受けたのが、先に挙げた墨書土器で、自分が閻魔様に召される代わりにご馳走を捧げて、免

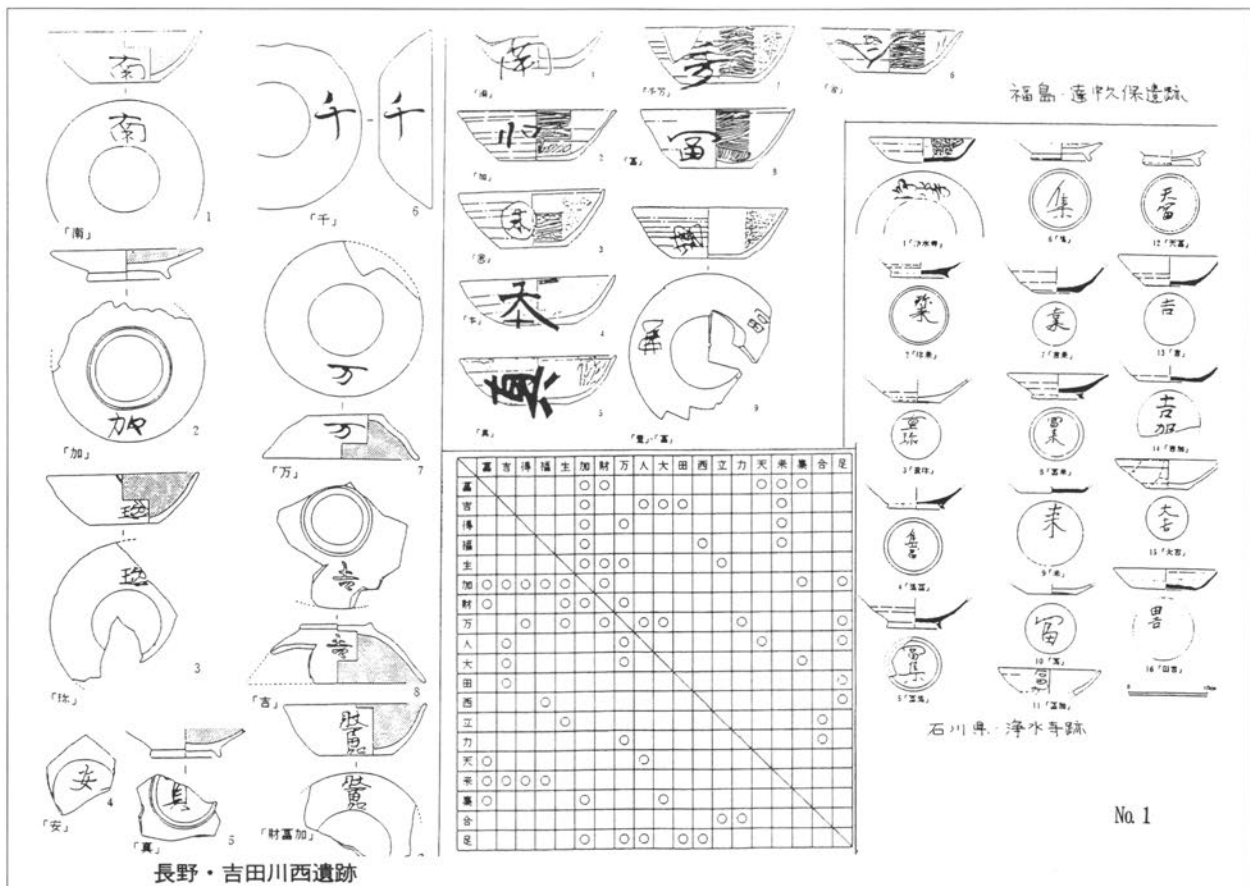
れようと必死に書いている。だから墨書土器の本質というのは、極めて現世のその当時の社会をそのままを写しているということ、理解しなければいけないわけです。

墨書土器は言ってみれば一般の村から出てきた資料ですが、もう一方では当時こういった村々を支配する役所、国の役所、郡の役所からも実は土器に字が書かれたものが出てきます。奈良の都から始まって各地のこういった公的な機関で書かれるものもあるわけです。それはどのような目的を持って書かれたのかということを見るために、ここではその代表として「厨」という字をとり挙げました。この「厨」は、調理をする厨房で、その厨房には土器がたくさん集められているわけですから、以前はこの厨房にある土器に全部字を書いたと考えて「厨」という字がたくさん出るとは思われましたが、実際にはたくさん出るわけではなくて、ほんの一部にしか書かれていなかったのです。その「厨」と書いてある土器のなかでも一番端的な例は、「国厨」と書かれたもので国府の厨というわけです。国の役所の厨です。ところがNo. 5 (P10下段) のところをご覧になってわかりますように、上総の国府とこの土器が出た千葉市の中鹿子第2遺跡では直線で14kmも離れているのです。これは常陸の国府と土浦市内の遺跡で、やはり14km離れた所で「国厨」墨書土器が霞ヶ浦のほとりから出たものがありますが、これらはいずれも国府から出たのではないということです。そうなるら一体国府の厨にある土器の全部に書いたのではない。つまり備え付けたものに全部書くのではなくて、これは丁度、村の祭りごとやお願い事をした時に書いたと同じように、郡の役所とか国の役所はいろいろな宴会を度々行うが、そのときに国の厨で調理をしたものを差し出す、そういった時に初めて「国厨」と書く。ですからこの中鹿子遺跡の周辺には丁度、東京湾と太平洋を見渡せる峠のようなところにある遺跡で、たくさん小規模の掘立柱建物跡があるように、ここに国に係わる国見的な、あるいは、境の迎えをやったのかその辺は良くわかりませんが、諸々の行事を行った場であることがわかります。そこで「国厨」と書いたであろうと考えますと、役所においてもこういうものが書かれるのはあくまでも、もてなしという行為のときに墨で文字を書いたと言えるわけです。

最後の7枚目の資料 (P11下段) には、墨書土器から地域を把握できるという例が最近目立ってきていますので、これを紹介したいと思います。これは展示さ

れておりますので、古代の地名がわかる墨書土器というコーナーを見ていただきたいと思います。遺跡名というのは、遺跡があるところの字名を付けるわけですが、市原市の草刈というところを発掘したら、そこから「草刈於寺坏」の墨書土器が出てきましたが、この「於」は上と同じ意味で使いますので、上の寺の坏をいっています。佐原市の吉原三王遺跡を掘ると「吉原」と書いてあったり、佐倉市の長熊廃寺というのは高岡にあるのですが、その高岡を掘ると「高岡寺」と出てくるとか、それから八千代市の萱田地区の白幡前を掘ると「草田」と書いてあるものが出土する。草田は萱田と読みますから地名となります。また、佐原市の伊地山というところから出土した中世の土器には「伊地山」と書いてある。最近では、我孫子市の新木東台遺跡からは泉と書かれたものが出ており、今、我孫子市に泉という所がありますので、現在に遺っている小さな地名もこういう形で出てくるのです。たった一点の墨書土器によって、一気に千百年、千二百年をさかのぼって地名がつながってしまうのです。これら8世紀や9世紀の土器にその地名が書かれているのですか

ら、こういう地名は非常に狭いところで正式な行政名ではないのです。国で編纂した『続日本紀』などに見られる末端の行政の単位は里・郷なのですが、当時の地域社会にはそれと同等の地域があったというわけです。それが行政上は一つだけ代表して郷になっているだけで、実際には草刈という所もあったし高岡という所もあったのだと。しかもそこに寺を建てる村人達は自分達の村の寺だというので「高岡寺」、「草刈寺」と付けたということになりますと、ますますその地域が一つの単位として存在したということもわかるのです。墨書土器の語る世界というものは今までの資料とは全然異なる側面から古代社会を十分に描き得ることが出来るのです。この性格をきちっと把握した上で使うならば、私たちがこれまで全く手にしていなかった新しい古代史の豊かな地域社会というものを語ることができる格好の資料である。ここに墨書土器の最大の意味があるのではないかと思います。墨書土器がなぜ消えたかということは後のフォーラムのところで述べたいと思います。一応時間がきましたのでここまでにいたしておきます。



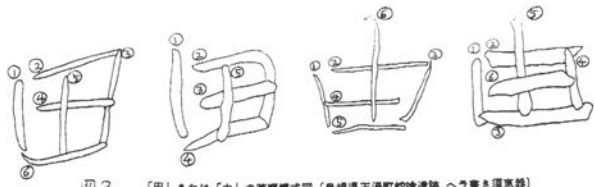
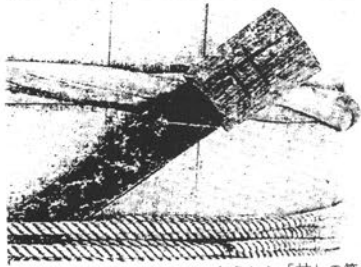
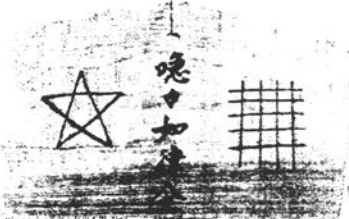


図3 「田」または「由」の源順模式図（島根県玉湯町蛇喰遺跡へう書き須恵器）



伊勢志摩の海女の磯ノミに印された「井」の符号



勸請繩の折柄札にみえる「☆」と「井」の符号（三重県上野市光明寺蔵）

民俗例にみえる魔除け符号

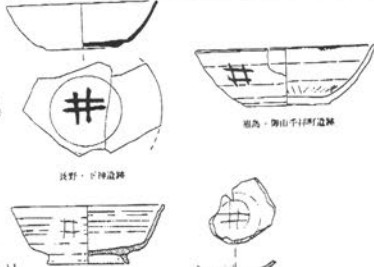


図4 「井」の字形
「井」小田刀名（千葉・作塚遺跡）



図1 「得」の字形

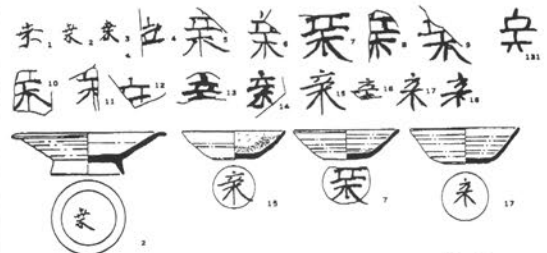


図2 「舟=采」の字形群と字形変化（山形県熊野田遺跡）

No 2

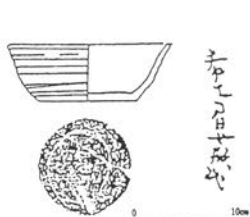


図6 八千代市北海遺跡の土師器片
外部外面・横位
「丈部乙刀自女形代」

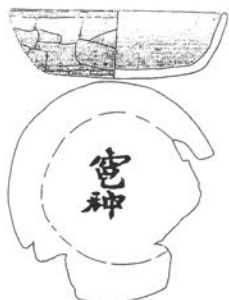


図5 千葉県庄作遺跡の墨書土器
58号住居跡 土師器片
外面底部「電神」

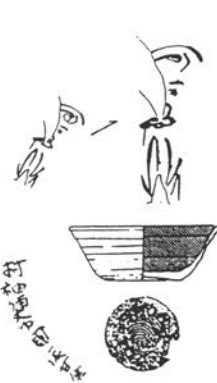


図4 八千代市権現遺跡の土師器片
内面 人面墨書
外面体部「村神郷丈部国依甘魚」

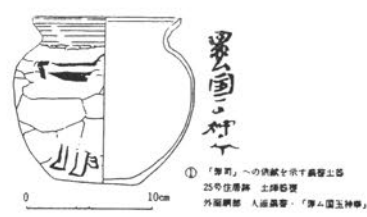


図1 千葉県庄作遺跡の墨書土器

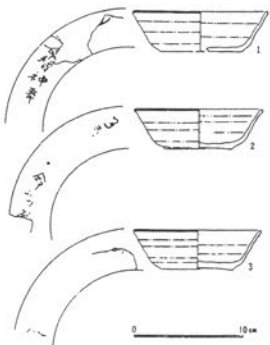


図8 長勝寺脇館跡の墨書土器（004大型土坑出土土器）
1 卍
2 卍
3 卍

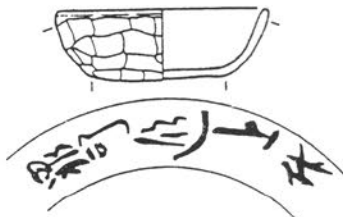


図7 富里町久松高野遺跡の土師器片
外面体部「舞司道土代」

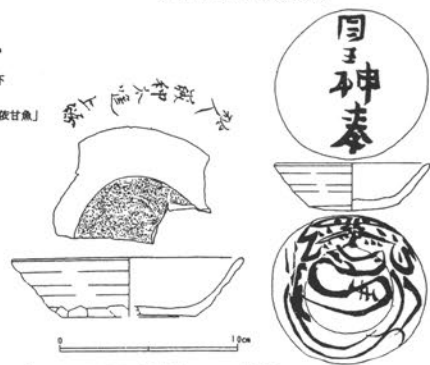


図3 千葉県庄作遺跡の墨書土器
46号住居跡・土師器片
外面体部「×秋人歳神奉進 上総×」
（千葉・庄作遺跡）



図2 千葉県庄作遺跡の墨書土器
67号住居跡 土師器片
外面体部 人面墨書
外面底部「手」
内面「國玉神華」

No 3

司会

どうもありがとうございました。それでは、これからは事例報告といたしまして5名の方々をお願いをしたいと思ひます。それでは初めに栗田さんから「佐原市吉原三王遺跡」について事例報告をお願いしたいと思ひます。

(2) 事例報告

栗田

ただ今ご紹介いただきました、市原市文化財センターの栗田と申します。よろしくお願ひいたします。私



栗田則久氏事例報告

に与えられたテーマは、佐原市にごぞいます吉原三王遺跡の成果ということでごぞいますけれども、県のセンターの職員でいたころ、昭和58年のころになりますが、その当時、東関東自動車道関連の調査がごぞいまして、吉原三王遺跡の発掘、そしてその後の整理報告という作業をやって参りまして、報告書の中でいろいろ検討していったわけですが、実はその当時は多文字の墨書土器といったものが出た、おそらく初めての例であったと思ひます。吉原三王遺跡の特徴ですが、後で説明をしますが、遺跡の中を区画する溝がおそらく8世紀の前半段階から9世紀の末までであったことが確認され、これは他にあります郡衙とかが出現してから消滅するまでの段階の動きによく似ております。吉原三王遺跡と書いてある3枚綴りの一番上にある資料(P25)ですが、中世の香取文書にありますが香取神宮領の地名が、区画の溝の中から出ていること、それと先程言ひました極めて律令行政文書的な内容の墨書土器が出たということから、報告当時は、おそらく香取神宮に対して中臣人成女という女の人を貢進交替する、香取神宮に進上するのだというようなことを報告書の中では述べておりました。ところが最近、平川さ

んの方から話がありましたように、同じような多文字あるいは文書形式を書いたような墨書土器が幾つか発見されており、その内容を見てくると吉原三王遺跡の多文字の墨書と極めて類似しているというところから、これの解釈についてはまた再検討をしなければいけないと考えておりました。今回、その辺を中心にして、吉原三王遺跡の再検討として皆さんにご報告をしたいと思ひます。

資料の方はA3判(P25)の吉原三王遺跡と書いた1枚と、図録の4ページ目からになります。村で使われた文字、村の姿を探るといふ所をご覧いただきながら話を進めていきたいと思ひます。吉原三王遺跡周辺の調査というも結構ごぞいまして、特に東関東道の調査に関しましてはここに触れておりませんが、東野遺跡では先程出てきました「国玉」といったものが一軒の住居から一括して出ています。寺関係では磯花遺跡というところで「寺七日」といふ墨書土器が、それから最近佐原市東部の方で、これは、後で笹生さんの方から報告があると思ひますが、実際に地名ですとかあるいは宗教関係のような文字を書いた寺名を出土した遺跡がかなり出ておまして、香取神宮周辺につきましては「国玉」のような在地からの信仰、それから寺関係の信仰、それと先程の吉原とか大島のような香取神宮関係の領地を示すような地名がかなり出ているというところから考えますと、香取神宮周辺には様々な形の祭祀、特に寺関係が中心になると思ひますが、そういった信仰形態が見られるということがこの周辺の一つの大きな特徴となってくるかと思ひます。

吉原三王遺跡の変遷について簡単に説明をしておきたいと思ひます。A3判の資料(P25)ですが、右から左に順次時代が新しくなってきます。吉原三王遺跡につきましては、ここでは奈良平安時代に限って資料をのせましたが、実は遺跡自体は6世紀の後半から続いております。古墳時代の6世紀の後半から7世紀の終わりくらいにかけては、一番左側の10世紀前半、11世紀中頃と書いた状況と極めて似ておまして、北側、図の上の方になりますが、上の方から延びている谷を意識するような形で集落が展開しております。ところが、8世紀の初頭になりますと、軒数は少ないものの分散していくような状況がその段階にごぞいまして、次の8世紀の前半の段階において区画溝が出現することになります。この時期の根拠については、住居の切り合いですとか溝の底面から出土した土器の年代からおそらく8世紀の初頭から前半にかけてこの区画

溝が掘り込まれたということが明らかになっておりません。

続きまして、実際に墨書土器がいつから出てくるかということになるわけですが、それについては8世紀の後半段階になります。ここで言うIIからV期と書いてあるうちのIV期になります。一番最初に出てくる文字は「吉原大島」ということになります。これは、8世紀の後半段階で、その後8世紀の終わりから9世紀の初めにかけて、その上にあります「八富」という墨書土器が出ております。その住居からは同じように「刀自女」, 「瓶刀自」などおそらく女性の名前と思われるのですが、こういったものが一緒に出てきております。それから次の第VIからVIII期, 9世紀の前半から後半にかけてですが、9世紀の前半から中葉にかけては、あまり遺構は検出されませんでした。勿論限られた幅の調査ですので調査区外に同時期の住居が発見される可能性は多分にあるかと思いますが、この中では、I区にあります023号という住居ですが、後で説明します多文字の墨書を多く出土した住居であります。その後の段階になりますと9世紀の後半段階にII区に「大島」, II区の南側にあります「大島」ですが、これが9世紀の後半段階。それからIII区にあります「吉原仲家」, これも9世紀の後半段階になります。そしてII区の東側, 南側の方にあります「大島」, これが9世紀の終わり頃になりまして、この頃墨書土器が消滅してきてまして、さらに、区画溝という意識もこの時期でなくなります。最後の10世紀前半, 少し空白期間があって、前半と言っても中葉に近い時期になりますが、11世紀の中頃にかけて、台地上に谷を意識した集落が展開しまして、11世紀中頃以降は、中世の墓地として利用される変遷をしております。

この中で注目したいのは「大島」, 「吉原大島」という墨書ですが、8世紀の後半段階で「吉原大島」, 9世紀の後半, それから末の段階で「大島」というように変わってきております。区画溝の中で地名が変化するという前提が正しいとすれば、おそらく「吉原大島」というのは、後に9世紀の半ばころになろうかと思いますが、その時期には「大島」というような標記に変化してくるということになるかと思えます。その資料は、中世の『香取文書』になりますが、下の段の1106年の資料『香取大禰宜家文書』巻之二(P25)という所にございます。その真ん中に「私領葛原牧」というのがございまして、その左に四至として波線で示しましたが、北限の地名として太田, 吉原, 大島堺

が見えます。それから左側の資料になりますが、ここでも最後の部分に吉原・大島堺という地名があります。おそらくこの段階では、吉原と大島とは地名として分けているということが明らかですので、おそらくその前の段階, 9世紀の半ばぐらいの段階で「吉原大島」の「大島」を分割して表示することが行われたと考えられます。

遺構の変遷については簡単に言いますと以上のようになりますが、先程言いました多文字墨書土器の内容について触れたいと思います。図録の5ページ目になりますが、ここの上段の右側と下段の左側にほぼ同じような多文字墨書を挙げておきました。まず右上ですが、「□香取郡大槻郷中臣人成女之替承□」, この承という字は、行政文書の中で承知というのが出てきますが、その承知か、あるいは年号の承和か明らかではありませんが、承和としましても土器の年代, 830年代であろうとすれば時代的に合うわけですが、そのいずれかになると思います。それから左の下ですが、「□香取郡大槻郷中臣人成女替□」と一番最後に年代がありまして「□年 四月十日」という文字が書いてございます。一番最初に言いましたように、これは当初香取神宮に対して中臣人成女を貢進・交替するのではないかという内容で解釈をしたわけですが、実はその当時からも、神宮に対する貢進・交替, 正倉院文書を見てもそういったものは紙に書くことが通例でありまして、こういった重要な内容をなんで土器に書かなければならないのかということが、疑問として残っておりました。最近、芝山町の庄作遺跡や、神奈川県藤沢市の南鍛冶山遺跡などで国名から記載している例が見つかっています。例えば庄作遺跡では、上総国, 郡と郷がはっきりとわかりませんがそういったものから書き始める、南鍛冶山遺跡でも国, 郡, 郷という文字を書いてそこに人面墨書が入るというような吉原例を考える際に参考となる資料があります。こういったものを併せて考えますと、写真を見ていただくとわかりますように、香取郡の上に一文字の残画, 上が割れているのですが、当時これが何なのか、普通に考えれば多分「国」で、他に「用」として何とかの用, つまり何かの祭祀を行うためにこの字を書いたというような両方の意味を考えておりましたが、先程の例から考えますと、そこには下総国というのが入ってくると思います。つまり、「下総国香取郡大槻郷中臣人成女之替」に。先程の平川さんの話にもあったように、これも土師器の坏という形ですから、中臣人成女の替にこの土師器

の坏に何らかのもの、捧げものを入れて天の神様に進上するんだという解釈になると思います。5ページにある二つの墨書土器に関しましては、今言いましたようなそういった形の祭祀、天の神様に対する祭祀に使うような形の内容が盛り込まれているのだろうというように考えるようになりました。ただ、遺跡の性格が一般の集落かというとは違って、それは区画溝は実際に生きているわけですので、中世の香取神宮の領地にあるような地名が区画溝の中に持ち込まれているということから考えるとやはり、吉原三王遺跡につきましては、私のA3の資料(P25)にありますように、『東南院文書』の波線を付しておきました、下総国香取郡神戸大槻郷、神戸と言いますのは、香取神宮を経済的あるいは人的な面で支える郷が大槻郷ということになりますので、この遺跡についてはやはり香取神宮を何らかの形で支えたような一般的ではない集落であることは間違いなさであろうと思います。ただしその中でも、先程の多文字の墨書土器にありますような在地の神様に対してお祭りをするといった祭祀も執り行われている。吉原三王遺跡は、おおよそ以上のような状況を示していると思います。雑多な話になってしまいましたが、この吉原三王遺跡につきましては報告書が出た当時、様々な波紋を投げかけたわけですが、その後の資料を平川さんも含めた形でもう一度再検討をした結果、多文字の墨書土器については、他の例にもあるような形の、天の神様あるいは閻魔様になるのでしょうか、そういったものに対する祭祀、まじない的なものを表す墨書内容であるということですので今回の結論にしたいと思います。ありがとうございました。

司会

どうもありがとうございました。それでは続きまして田形さんから「印西市鳴神山遺跡」の事例報告についてお願いいたします。

田形

ただ今ご紹介いただきました千葉県教育庁文化課の田形と申します。よろしく申し上げます。これから私が事例報告をいたしますのは、千葉県の北の方になります。印西市にあります鳴神山遺跡という所です。遺跡の説明をお手元に配付いたしております図録の方で説明していきたいと思っておりますのでよろしく願いいたします。

図録の8ページですが、遺跡は現在の印西市に所在



田形孝一氏事例報告

します。そちらの方で大規模に造成が行われておりますニュータウンの一角に当たる遺跡です。おおよその位置は千葉ニュータウン内のニュータウン中央駅の南側にスーパーダイエーがあり、そのダイエーの駐車場の南側に当たります。それで、8ページの図の下にのせましたように、台地上の平坦面を利用しまして集落が検出されたわけですが、これからの私の説明では竪穴住居を竪穴建物という用語を使わせてもらいますが、竪穴建物が281棟、掘立柱建物、素柱だけの建物ですが、これが43棟、あるいはそこに書きました井戸状に掘り込んだ遺構が2基とか道路ですとか、溝とか、土坑など各種の遺構が見つかっております。建物の数ですとか見つかった遺構や遺物の種類ですとか数が非常に多いわけですが、特に際立って特徴的な遺物が出たというわけでもありません。これだけ数を掘っておりますので、珍しいものもいくつか見つかったわけですが、例えば全国で幾つかしか見つからないとか、県内で幾つかしか見つからないとかいう遺物が特にあるわけではなくて、私は房総における、特に北総地域ですが、房総における一般的な拠点集落の一つだというふうに考えているわけです。ただし、他の集落と若干の違いがあるのは、今日のテーマであります墨書土器、あるいは鳴神山遺跡では墨書土器以外に、先程平川さんの方からありました、土器を焼き上げた後に傷をつけ、文字や記号を書いていく線刻土器と呼んでおりますが、焼成後に書かれたもの、あるいは焼成前に書いたヘラ書き、そういう墨書土器や線刻土器が他の遺跡よりもいっぱい見つかったことが挙げられます。これがなぜ多いのかということは後程のテーマにもなってくるかと思いますが、鳴神山遺跡からはまだ正確なカウントはしていませんが、1200点以上の墨書土器等が出ております。その中で、墨書土

器と線刻土器の割合は、墨で書いたものが600点程度、それ以外は土器焼成後に線刻した土器が同じ数ぐらいあります。鳴神山遺跡跡では他の遺跡よりも、その量が多いのが大きな特徴であると考えます。

8ページの図で説明をいたします。先程の吉原三王遺跡のように詳細な分析がまだできておりませんので、非常に雑ばくな説明で恐縮ですが、四角く箱のように囲ってあるのが一つの竪穴建物の単位です。それから細かい丸がくっつきあって四角になっているのが掘立柱建物の一棟です。図の北の方に東側から細い谷津が入っております。そこにつながるように、一本の道路、遺構としては溝状に掘り込んで、いわゆるオープンカット方式と呼ばれるような溝に掘り込んだ遺構なんです。硬化面を持っており明らかに道路として使った痕跡があります。その道路が一本東側の谷に降りるような形で見ついております。この見ついている道路は、8世紀後半の遺物が出土しているのですが、一軒の建物とも切り合いはありません。すぐ側までには建物が造られていますが、この道路が集落形成に大きな役割を持っているのだということが言えます。それから後で触れますが、鳴神山遺跡の北方1.7kmの所に大塚前遺跡というのがありまして、この遺跡には下総国の国分寺の瓦を使って、全面的な瓦葺きではないですが、瓦を屋根の中心部分に葺いたようなお堂のようなものが見ついている特徴的な遺跡が存在しております。これは鳴神山遺跡の性格を探るのにとっても重要な手掛かりとなると考えています。

それで、鳴神山遺跡の集落の時期ですが、弥生時代の終わりから古墳時代の初めにかけて非常に散漫として、竪穴建物が見つかりますが、後々まで継続する集落としては、8世紀半ばすぎから9世紀代にかけて一部10世紀代の土器もあるのですが、10世紀になるとほとんど台地上からは、明確な竪穴建物が見つからなくなってしまいます。ですから集落の時期は、およそ150年あるいは170年ぐらいと考えてよろしい時期と思います。また、先程言いましたように墨書土器が大変多いという中で、鳴神山遺跡跡から見つかった多くの土器の中で、先程平川さんから話もありましたが、文字を書く土器に限られております。ほとんどがいわゆる坏とか皿・碗ですとか、ものを盛る供膳具というものに限られています。そういうものは鳴神山遺跡でも墨書土器以外でも当然のことながらたくさん見ついているわけなんです。その中で、どのくらいの割合であるのかということは正確な数字はここにはのせていませ

んが、見つかった土器の中で、ほんの数パーセント程度です。鳴神山遺跡跡では墨書土器が非常に多いということで、前々から注目されていた遺跡ではあるのですが、やはりその中で集落の中で見つかる土器のなかではほんのわずかのものでしかないというのも、今回のテーマのなかで一つのおおきなポイントを占めるのではないかと思います。

それでは、鳴神山遺跡の墨書土器について、どのような分析について話ができるか説明していきたいと思えます。まず、先程平川さんの方からも話がありましたように、墨書土器が識字層をあらわすバロメーターにはならないということで、墨書土器の字形変化ということを取り挙げてみました。図録の9ページですが、鳴神山遺跡跡で一番多く見つかった墨書土器の文字内容に「大」という字、「大」に「加」えると書く「大加」、読みは正確にはわかりませんが、そういう文字があります。あるいは、「山」に「本」で「山本」というものもあるのですが、この文字が左側の方から右側の方へ変わっていくという状況があります。最初はきちんと書かれている二文字が次第に「大」のすぐ下に「加」を書く段階があり、次には二文字が一緒になって「大」の画に「加」の最初の画を合わせてしまうようになり、はっきりとした「大加」があるから読めますが、いきなりこういう文字が出てくると、なんと読むのかということになります。一番右側のものは更にそれが極端になっているもので、典型的なんです。完全にロゴふうになっているものです。おそらくこれだけで出てきたらなんだろうかと思われることでしょう。鳥の絵かと思えない、字としては考えられない。しかし、鳴神山遺跡跡ではこれらの資料がたくさん出ているのでこのような字形の変化がたどれるわけです。「山本」についてもきっちり「山」に「本」を書いたものから段々右側になりますと「米」に近いような形で書くような「山本」に変化をしていきます。これも字形変化の一つですが、鳴神山遺跡跡ではこのようにたくさんある墨書土器の中で、出土数の多い文字資料の字形変化をたどれるということが、明らかになっています。こういう例は鳴神山遺跡跡が調査される以前に、東金市の久我台遺跡でも同じような字形変化がたどれるということが既に知られております。先程多いと言いました鳴神山遺跡跡の墨書土器ですが、これから紹介いたします多文字の墨書土器以外にも多くは、一文字二文字が圧倒的に多いわけですが、そこに代表的な文字を幾つか挙げておきました。また、いくつか

は展示資料として使わせていただいておりますが、「大加」以外に「依」とかが集中的に出る場所、「富」という墨書が集中的に出る場所というように、冒頭の平川さんの講演でもありましたように、全国的にポピュラーな文字が遺跡の中において集中する場所があるわけですが、そういうことも鳴神山遺跡でも捉えることができます。また、9ページの一番下に面白い事例として取り挙げましたが、人偏に百と書いて「佰」と読む字ですが、資料は普通の写真ですのではっきりわかりませんが、人偏の二画目に濃い部分と薄く突き出た部分があります。これは一度書いて、また、それを上からなぞっている、習字の用語で填墨^{てんぼく}というそうですが、そういったなぞってもう一度書き直したという資料です。筆使いとしては非常に整った書き方と思いますが、一度書いた上をなぞっているという、土器に墨書することが大変だったと思わせる資料として取り挙げました

それから10ページ目で、鳴神山遺跡でも多文字の墨書土器がたくさん出ています。この中で特に、先程来から話が出ています、人名を書いて「形代奉」ですとか、だれだれの代わりに「進上」するとか、そういう特徴的なものが多く見つかっています。10ページ目の一番上ですが、これも展示資料にあると思いますが、中型の甕ですが、外面に右端の方から墨書では読みにくいんですが「国玉神 上奉 丈部鳥 万呂」という墨書があります。これに人面が伴う場合が県内にありますが、この土器には人面は観察されませんでした。これは「丈部鳥万呂」という人物が国玉神に何かを捧げて祈っているという姿をストレートに現していると解釈できます。その下ですが、同じような文字内容で、「丈部山城方代奉」、これとは別に「丈部尼」とあります。また、土器が割れておりますが「同」から始まる「同□丈部刀自女召代進上」というふうにかかれているものもあります。非常に面白いと思いますのは、「召」という文字を書き忘れたためか「女」と「代」の脇に書き足されたものです。これらの文字は土器の外側に横位置に書くという特徴的な書き方をしております。多文字の墨書土器については、甕に書くものは縦位置に書くものが多く、坏などは体部外面に横位置に書くというのが特徴的であります。それと同じような資料で「大国玉罪」と書いて、その下は欠けておりますが、そういう資料とか、年紀を書いたもの。上に一文字以上あると思いますが、「□仁九年九月廿」以下、土器が欠けていてわかりません。そういうものが

特徴的に出てきます。ここで資料の訂正なんですけど、10ページの人名を書きました「日下部」の「牛足」と書いてありますが、「牛足」が誤っておりまして、「吉人」と訂正をさせていただきたいと思います。文字は、先程の栗田さんの吉原三王遺跡の7ページ目にありました「吉原仲家」の墨書のなかにも「吉」と同じ字形のものがありますのでおなじように「吉」と解釈できると思います。

これらの多文字の墨書土器以外にも、鳴神山遺跡では人名を書いたもの、あるいはそれらの省略形という解釈をするわけですが、人名の一部などを書いたものもありますので、きっちり年紀を書いて、名前を書いて、国郡郷や里の名前を書いて神様の名前も書いて、だれだれの代わりに、例えば「甘魚」みたいな実際に盛っているものの内容まで書いているスタイルのものもありますし、人名だけを書いたもの、省略形と解釈できますが、そういう文字内容が豊富な資料の中から窺うことができます。それらの多文字資料については、これから後で話があるかと思いますが、国神に対して様々な祭祀を行っているのではないかというふうに捉えることができるわけです。

もう少し話を進めていきますが、遺構と墨書土器がどのように出てくるかということの説明したいと思います。

11ページの上の方になりますが、台地上に井戸状の遺構が2基見つかっています。遺構の形としてはよく低地上の遺跡に掘られている遺構です。形は井戸なんですけど、台地上にそのような遺構を掘っても、もちろん湧水は出ません。ここの近辺で標高は25mぐらいか30m弱なんですけど、そういう台地の上では深さが2m強程しかないんですが、それくらい掘っただけでは水は湧きません。だけど形としては低地の遺跡にある井戸のようなものを掘っているというような遺構が幾つかあります。鳴神山遺跡以外にも県内のあちこちの台地上の遺跡からこのような遺構が見つかっておりますが、そのような遺構を人為的に埋め戻して、大量の土器と獣骨、具体的には馬の骨だったのですが、馬の頭骨だけや貝殻を人為的に一括して廃棄する形でこの遺構の中に投棄している。先程紹介いたしました「大国玉罪□」という墨書がこの遺構から出てきており、大量の土器とともに廃棄されております。ほかの墨書土器としては「高」などがありますが、このような井戸状遺構を利用した何らかの祭祀が行われ、祭祀が終了した段階で、一括して廃棄しているのではないだろう

かという状況です。

鳴神山遺跡では2基見つかっていますが、竪穴建物が281棟見つかった中でわずかに2基ということは、こういう遺構が戸単位の祭祀ではなくて、村全体の中で、共同体の祭祀ではないかと考えています。

それから最後に、8ページ目の遺構全体図について触れさせていただきたいと思いますが、遺跡の一番北辺で竪穴建物が非常に少なくなっていくなかで、一番北側に小さな竪穴建物があります。写真が11ページにあります。1辺が2m程度の規模で、竪穴建物としては一番小さい部類の竪穴です。竈も貧弱な造りで、床面も硬くなく使用期間もさほど長期間でないこともわかるわけですが、そういう建物から11ページの下の写真にあるように、僧侶が托鉢の時に使用する仏鉢と呼ぶ特殊な土器が見つっております。その土器にはその土器に直接由来する「佛」という墨書が書かれています。北の外れの竪穴建物の一つに、そういう仏鉢が置かれた状態で見つかりました。直接関係するかどうかは検討が必要だと思いますが、鳴神山遺跡の中心地に、三間×三間の掘立柱建物がありまして、その周辺から瓦塔の破片も出土しております。今回は写真や図面で示すことはできませんでしたが「播寺」、あるいは「波田寺」と書いた墨書土器があります。読みとしては手偏の「播」も「はた」というふうに読めると思います。おそらく鳴神山遺跡の中にお堂のような寺があったのではないかとこともわかります。村の中にお堂があり、冒頭に言いましたように、大塚前遺跡という下総国分寺と非常に密接な関わりをもつ遺跡が北方1.7kmの所にあるということから、鳴神山遺跡と大塚前遺跡とが非常に密接に係わるとすれば、大塚前遺跡がどういった遺跡なのかということも検討していきながら、大塚前遺跡から鳴神山遺跡に布教等に僧侶がきている可能性も十分に考えられるのではないだろうかと思えます。(ただし、「丈部尼」については、図録に書かせていただきましたが、訂正して削除させていただきたいと思えます。)

以上、遺跡の概要をお話ししましたが、遺跡が広大で資料の分析などが終了しておりませんので、途中経過のようなことで大変恐縮ですが、北総のそういう古代村落である集落の事例を報告させていただきまして、私からの報告は終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

司会

どうもありがとうございました。それでは続きまして阿部さんから「古代印旛郡内における文字の在り方」についてということで事例報告をお願いしたいと思います。

阿部

ただ今紹介にあずかりました、四街道市の阿部と申します。今年の3月まで印旛郡市文化財センターとい



阿部寿彦氏事例報告

う所で発掘調査をしておりました関係で、印旛郡市内の資料について若干関係をしておりましたために今回参加をさせていただきました経緯になります。私の発表は大きく分けて二つの点について発表したいと思えますが、二つとも印旛沼を中心とする地域の中での文字資料の在り方についてであります。平成8年に刊行されました『県史』の出土文字資料が集成されたものの中に一万点に及ぶ墨書土器が掲載されております。その中で印旛沼に面した周辺、八千代とか佐倉、成田など周辺の8市町村の出土数が5400点を超えておまして、千葉県内で出土している墨書土器の半分以上がこの印旛沼周辺域に集中していることがわかります。現在も先程田形さんの方から説明のありました鳴神山遺跡、あるいは平川さんのお話に出てきました八千代の上谷遺跡、この辺はこの数字に含まれておりませんので、かるく見積っても現段階で7000点から8000点くらいの墨書土器が8市町村の中で出土しているという状況になっております。これだけたくさん文字資料が集中的に何か所出土するというのは、おそらく全国的に見ても極めてまれな事例であると思えます。その中で極めて特徴的なものの一つが栄町の五斗蒔瓦窯跡、もう一つが今までなん回か話で触れられてきましたが、神への祭りを表した墨書内容をもつ土器。そ

の二点についてこれからお話させていただきます。

まず龍角寺の瓦を焼いた窯として栄町の五斗蒔瓦窯跡について話をしたいと思います。龍角寺というのは皆さんご存じのとおり、関東地方でも最も古い段階のお寺の一つとして位置づけられ、最近の年代観としては7世紀の第3四半期、西暦で言いますと650年から675年頃におさまるのではないかと考えられています。その龍角寺ですがどこにあるかと言いますと、房総風土記の丘の近くということになるのですが、私の資料の17ページの上のところの資料ですが、そこに香取の海と地図上に書き込みがありますが、この地図は普通の地図の標高20mの等高線を結んで作った地図で、低地と台地が視覚的にわかるように作ったものですが、必ずしもこれが当時の海岸線であったというわけではありません。あくまでも目安であるということをお断りいたします。香取と書いてあります取の下に南から飛び出てくる台地がありますが、この台地の上に龍角寺が存在します。それから五斗蒔の瓦窯跡もこの近くに存在します。同じ台地上ですが、岩屋古墳という7世紀中頃の終末期古墳といわれる中では日本で最大級の四角い古墳、方墳が存在したり、龍角寺の南1kmの所には古代の埴生郡の役所の跡である埴生郡衙の跡などが最近検出されています。なぜそういった重要な遺跡が集中しているかと言いますと17ページの地図をご覧くださいになってわかるように、古代の香取の海というものに突き出した台地、さらに印旛沼、当時は印旛の浦と呼ばれていた香取の海の内海に当たります。その印旛の浦から香取の海に抜ける出入り口部分、非常に地形的にいい場所に当たって、水上交通の要地としてこの土地が非常に重要な土地であったと、そこに岩屋古墳や龍角寺、埴生郡衙といった重要な施設が次々に作られていったという形になります。龍角寺の最初の段階の瓦を焼いた窯として、栄町の五斗蒔瓦窯跡がありますが、ここの特徴の第一がなんと言っても、瓦に文字が書かれているものが非常に多く出土したことです。破片の点数で言いますとおよそ1800点以上、割れたりしていますが、枚数にして400枚程度の瓦に文字が書かれておりました。文字は焼く前にヘラなどの尖ったものでひっかいて文字を書くというヘラ書きされたものです。1800点以上、枚数で400枚というのは瓦の窯に残された瓦に書かれていたということになりますから、瓦が供給されたお寺の方に持って行かれた瓦を合わせますと、非常に桁違いに多い文字ということがまだまだ龍角寺周辺に眠っているということになると思

います。その五斗蒔瓦窯跡の瓦に書かれた文字ですが、19ページの真ん中へんにその文字について幾つか種類をのせておきました。

五斗蒔瓦窯跡は前半と後半の二段階ほどに焼かれた時期が分かると考えられていますが、その前半の段階、これが7世紀の第3四半期ごろ、文字の種類としては、「朝布」、「麻布」、「神布」、これはよくわかりませんが公津のコウカ、「神乃布」これもよくわかりません。「神真」でカマ、「赤加」でアカ、「赤加真」でアカマ、「赤久在」でアカハ、こういった形で、これはおそらく「加皮真」でカハマというものも出ておりますので、おそらくアカハマという同じ内容のものをこれだけの文字で書きわけたということが今のところわかっております。「服止」でハトリ、「皮止部」でハトリベ、「水津」でミズ、あるいはミナツ。それから「女瓦四百五十」といった文字が出土しています。後半の段階では「玉作」、「小加」でオカ、「皮尔」でハニ、あるいは「野」といった文字が出土しております。前半段階で見られる文字の種類というのは37種、後半の段階はすこし減りまして8種類という形になります。五斗蒔瓦窯跡の前半と後半の間に龍角寺に瓦を供給した瓦窯が、もう一つ龍角寺瓦窯というのが近くにありますが、その龍角寺瓦窯の中で「加刀利」の文字が出土しておりますので、一段階、二段階、三段階で文字が変遷していることがわかります。

この龍角寺に瓦を供給した五斗蒔瓦窯跡、この五斗蒔瓦窯跡から出た1800点以上の文字瓦が意味するものはどういうものか、というのは大きく分けて3点あります。まず一つは、7世紀後半という時代で、東日本でも最も古いものに位置付けられる文字であること、これは文字として表記することが熟する以前のものとして、音の表記、例えばアソウと書くにしても「朝布」と「麻布」と書くもの。「アカハマ」という字に至っては、7通りか8通りのいろいろな書き方をしておりますので、こういった音の表記、つまり文字としてあまり安定していない時代、こういう状況は国語学的に見ても貴重な資料で、7世紀後半の段階の資料とするならば国語の始まりの段階として非常に貴重な資料であろうと思われます。二つ目が前半の段階で瓦のほとんど全てに文字が刻まれているという状況でした。それはヘラ書きという粘土が柔らかい段階で傷をつける書き方をするものですから、平川さんの話の中であつたように、筆順がわかるということで、その筆順を細かに分析をしていきますと、文字を書いた瓦工人のく

せが読み取れる。文字を書く工人が何人いたか、どのように瓦の生産に係ったか、瓦を造る組織、瓦の生産の様相がわかる貴重な資料なのではないかと、これはまだはっきりと、何人が係わったのか、あるいは瓦の生産の状況がどのようなものであったのかということはこれからの課題になるかと思えます。三点目については、書かれた文字も内容が地名と思われるものが非常に多く含まれるというか、ほとんどが地名であると判断されることです。例えば「朝布」,「玉作」については、後の埴生郡に麻生郷,玉造郷というのがございますので、郷名の表記に結び付くのであろうと考えています。さらに、「神布」,「加皮真」,「加刀利」,「水津」などはおそらく地名を表しているのであろうと思いますが、その地名が後の郷に全然つながるものではないということ。例えば郷の下の地名であるのか、あるいは郷とならぶような地域を代表する地名であるのか、その辺はわかりませんが、こうした地域から瓦を納めさせた、あるいは瓦を納めた代表の地名、そういう状況の下で書かれたものであると思われる。ここで一つ地名の変遷というか、各段階の瓦に出てくる地名、出てこない地名というのを見ますと、前半段階と後半段階の間、つまり第二段階のところで龍角寺瓦窯の段階で「加刀利」という地名が出てきます。五斗蒔瓦窯の後半段階、一番最後の段階で出てくる「皮尔」に負を付けて「ハニフ」というふうに読める可能性があるのですが、埴生の文字が出てくる。こういったことを考えますと、埴生郡というものが、いつできたかについては今のところはっきりとわかっておりませんが、この埴生郡ができる以前の段階に龍角寺を造営した人物が影響力をもっていた地名を表記した可能性も考えることができると思います。こういった点からも埴生郡の建郡以前、郡郷制がしかれる以前の小さな地域のまとまりについて貴重な資料になるのではないかと思います。

それからもう一点、印旛沼周辺地域の特徴といたしまして、神への祭りを表す墨書内容を示すたくさんの土器が出ていることで、資料の方は16ページから18ページまでになります。16ページの写真は「神」あるいはなにに神,「毛神」,「石神」,「歳神」それから「神屋」,「神宮」,こういったものについてはお祭りを行った相手の神そのものを書いたもの、あるいは神と関わる施設を書いたものとして間違いのないと思います。もう一つ「神奉」,「国玉神奉」とか酒々井の長勝寺脇館跡のように「命替神奉」といったよう

な形で神に奉るという文字とともに人名あるいは神の名前を付けたもの、こういったものが現在で12遺跡程度で出土しております。それから神、あるいは神奉るなど直接的に文字は含まないけれども同じような内容を示すものとして、25ページの上にありますような「罪司進上代」,これは先程平川さんの話にありましたように、冥界の閻魔様に捧げるもの、あるいはその隣に「村神郷丈部国依甘魚」という形で、人面と一緒に書かれているものなんかについても、捧げる相手の神の名前なんかは書いてはありませんが、これもおそらく神様に何かを捧げるお祭りを行った時に書かれたものというふうに考えることができるかと思えます。そういった形で、あとはもう一つ「神屋」,これはおそらく神様がそこに降りてくる社のようなもの、そういったものを表すような施設と考えられますが、こういう四種類程度にその神への祭りを書いた墨書土器は分けられると思います。そういった墨書土器は先程言いましたように印旛沼周辺に非常に多く分布しています。「神」あるいは「神奉」などと同じ内容を示すと考えられる墨書土器を分布図に落としたものが17ページ上の「神」,「神奉」関連文字資料出土分布図です。星印が中央部に集中する地点が、ほとんど成田市、佐倉市、富里町、印西市などに当たります。この分布をよく見ますと印旛沼に集まる所と、端の所に点々と遺跡が分布しておりますが、ほとんどが海岸際に分布すると考えていいと思います。

「神」の墨書の分布範囲はなぜ印旛沼周辺にたくさん集まるのか、しかもその中身については「国神」あるいは「国玉神」といった形で、国神と同義語ではないかと思いますが、いわゆる在地の神様に対してお祭りを行ったという土器の内容、お祭りの内容を示す土器、これがどうして香取神宮、鹿島神宮のおかれた地域に多く分布するのか。その一つのヒントとして18ページの千葉県神社分布図ということで、これは香取神宮系、香取の摂社である側高神社、それと印旛郡内宗像神社、麻賀多神社、鳥見神社の三神社があるのですが、その分布を、昭和48年の神社分布図から拾ってみました。それを見ますと右側から赤色で塗った部分が麻賀多神社、中央の青色の部分が宗像神社、左側の緑色の部分が鳥見神社にそれぞれ当たります。これはほとんど旧印旛郡域がこの三社しかないという、この地域ではほぼ千年たった現在でも香取神宮系の神社が一つも入っておりません。下の方に香取系ということで黒丸が何点かありますがこれは四街道市の香取神社、

四街道市は千葉郡ですので、印旛郡内では千年たっても香取系の神社を一切拒否しているという姿勢が窺えるのではないかと思います。神社あるいは古来の神道というのは仏教などとは違いますが、決まった經典・教義というものがございません。そういったものがどこで伝承・保存されていくかと言いますと、これが神社という形となります。非常に民俗学的な問題になるかと思いますが、神社の分布、これは特に印旛郡内の三社の分布を見ますと、非常に古い時代の様相をそのままずっと引きずってくるんじゃないか、そんなふうに考えております。あともう一点海沿いにこの神関連の墨書土器が分布することと併せて、「神」の書かれた墨書土器については、お祭りをする人の名前を書かれたものが何点かございます。その例として鳴神山遺跡、八千代市の権現後遺跡・北海道遺跡・白幡前遺跡、芝山町の庄作遺跡、成田市の腰巻遺跡の6例で、だれそれが、何々の神に、なにになにするという神への祭りを表している墨書土器のうち名前が書かれたもの、6例中5例が丈部という姓をもっているということに注目したいと思います。一つだけ日下部という名前が使われているのが成田市の腰巻遺跡ということになります。この丈部という氏族の特徴的なお祭りの形態であった可能性があって、それが例えば27ページ右上にあるように、福島県いわき市荒田目条里遺跡で出土しました「丈部手子磨 召代」という神への墨書。あるいは、人面も一緒に書いてありますが、こういった様相が非常に千葉県の印旛郡域周辺の様相と似ておりますので、この丈部という氏族、それから海沿いに分布するという点、それと神への祭りへの固有の形態、この三つすべてが結び付く可能性もあるいは考えられるかもしれません。だいたいそういったところで、印旛郡内における神へのお祭りの内容をもつ墨書土器、多少想像も含めてこんなふう考えているところです。最後に一つ付け加えると、成田市南囲護台遺跡出土ということで17ページにのせました「寺社」、寺と神社の社ですが、これを書いた墨書土器が普通の竪穴住居の竈の中に土器を20点近く逆さに重ねた中の一番上に出ていたのがこの「寺社」という墨書土器ですが、こういったようにごく一般的な村の中でも神仏集合的な寺と社という字が結び付いたものがあったり、あるいは冥府への賄賂行為を示す「罪司進上代」、「竈神」こういったように、非常に信仰の形はいろいろな様相が複雑に混在して、お祭りが行われていた可能性がある。そういうことが墨書土器の検討からわかると思

ます。

ちょっと説明のほうがいろいろごちゃごちゃになってしまって、お聞き苦しかったと思いますがどうかお許しください。では失礼をいたします。

司会

どうもありがとうございました。それでは続きまして笹生さんから「墨書土器と仏教信仰」についての事例報告をお願いいたします。

笹生

千葉県文化財センターの笹生です。よろしくお願いいたします。いま、阿部さんの方から神様に関する



笹生 衛研究員事例報告

ということで、墨書土器の紹介があったわけですが、私は、仏様の関連の墨書土器について県内全体の傾向をまとめてみました。今回のまとめ方としては地域的なまとまりがどうなっているかというところに主眼を置いております。仏様に関係する墨書土器としては、「仏」とか「寺」という墨書土器、鉢や水瓶などの仏具、さらに瓦塔などの遺物が出ているわけですが、県内ではこの種の遺物がかなり確認されておりまして、古代仏教の多様な在り方が次第に判明してきているというのが現在の状況です。この種の遺物の県内に分布状況を見ますと、一定な地域的なまとまりを見ることができるところです。その地域的なまとまりとしては、12ページから始まる私の資料に県内の分布地図を挙げておきましたが、まず、一つは山辺郡域、続いて上総国の南西部域、それから今日話の中心となっております印旛・埴生郡域、そして最後に香取神宮周辺の香取郡域です。今日は、この四つの地域にしばって話を進めさせていただきたいと思

山辺郡域は上総国の北東部に位置し、地形的には西

の丘陵地帯とその東側に続く台地、さらに太平洋に続く台地と低地から構成されております。西部の丘陵地帯は現在の千葉市の土気地区も含まれる地域でありまして、上総国分寺の創建期の瓦が生産され、上総国分寺・上総国府との強い関連が指摘されている所でありまして。ここには上総国分寺と同じ瓦文様をもちます瓦を使用しました小食土麿寺、さらに「釈迦寺」とか「祥寺」、「仏」などの墨書土器、鉢や水瓶などの仏具が出土しております鐘つき堂遺跡、内野台遺跡、大椎遺跡、大野遺跡という仏教関連の遺跡が多く存在しております。年代的には8世紀後半から9世紀代が中心となっております。これら遺跡群の性格についてはいろいろと議論があるところですが、私は現段階では上総国分寺との強い関連を考えて、悔過などの修法を行う上総国分寺の山寺とか修行場としての性格を想定することも可能ではなかろうかと考えています。この土気地区の東側に隣接するのが、現在の大網白里町から東金市西部に広がる大網山田台遺跡群、さらに大網白里町にあります砂田中台遺跡、南麦台遺跡、さらに山荒久遺跡などの遺跡群です。これらの遺跡は、竪穴と掘立柱建物で構成される集落遺跡なのですが、大体年代的な傾向としては8世紀後半から9世紀代にかけて集落規模が拡大する傾向が見られるわけです。この遺跡群では墨書土器では資料の方で言いますと14ページに一通り出してありますが、「山辺」、「山辺家」や「山口万」といった山辺郡や山口郷に係する地名の墨書土器。それに「刑部酒主女」という人名墨書、そして山荒久遺跡から出土したのですが舶載の唐式鏡、さらに奈良の二彩や三彩陶器が出土している。一方、遺構の面から言いますと、多数の掘立柱建物跡が検出されているという点にも特徴があります。例えば大網山田台遺跡群の中では、猪ヶ崎遺跡では、竪穴住居が190軒に対して掘立柱建物跡が238棟、金谷A遺跡におきましては竪穴が29軒しか出ないのに対して掘立柱建物跡60棟が出ている。さらにここに出してあります、新林遺跡では竪穴が163軒に対して掘立柱建物跡63棟という具合に、掘立柱建物跡の比率が高い状況が指摘できるわけです。こういう状況を総合して考えると、こういう遺跡の性格は何かということになるわけですが、そのとき一つのヒントとなるのは、この遺跡群のすぐ南側に近接して存在した茂原荘ではないかと思ひます。茂原荘と言ひますのは、藤原菅根の寄進状でご存じの方もあるのではないかと思ひますが、宝龜年間頃に上総国の国司の経験者である藤原黒麻呂が開

いたとされる初期荘園の典型例で、この大網山田台遺跡群とか砂田中台遺跡はすぐ北側に隣接する地域に当たっております。さらに先程平川さんの方からもお話がありました、「国厨」の墨書が出ました中鹿子遺跡も実はこの茂原荘と土気地区、さらに大網山田台遺跡群の隣接地域で比較的近い場所にあるという地理関係にあるわけです。これらの遺跡群の性格推定については、今後さらに手続きを踏んでいかなければならないと思ひますが、先程の出土遺物や遺構の性格・年代的な傾向から、この大網山田台の山辺郡の中心となる遺跡群についてはある意味では茂原荘に類似した初期荘園的な性格を推定することが可能ではなかろうかと考えているわけです。この遺跡群において仏教信仰はどのようなものであったかということですが、「仏」、「寺」などの墨書土器と一緒に「殿寺」とか14ページに出してありますが、「法」と書いて「ササ」と書いた墨書土器、これはおそらく菩薩になると思われ、仏教関係の墨書土器が出ている。さらに仏鉢、新林遺跡のように四面庇の仏堂建物が出ているわけです。そしてその仏堂において使用している瓦については、上総国分寺系の唐草瓦が軒平瓦に使用されているというような状況で、初期荘園的な性格が考えられる集落の中に国分寺と関連をもった仏教信仰が入ってきていると想定することもできると思ひます。これはまた、いろいろな手続きを経て証明をしていかなければならない内容ですが、今、一つの可能性としてそういう状況が指摘できるのではないかと思ひます。ですから山辺郡のこういう仏教関係の墨書土器の集中については、西部の丘陵部の山寺を通じて東側に広がる新興の集落内に仏教信仰が入ってきた結果というような形で整理することも可能ではないかと思ひられます。

では他の地域ではどうでしょうか。次に上総の南西部地域の状況を見てみたいと思ひます。南西部地域は東京湾に面した現在の袖ヶ浦から富津にかけての地域が中心となります。この地域につきましては、下総の国と比較しますと、一般的に墨書土器の出土量は少ない傾向が認められます。しかし、望陀郡、周准郡の郡界の丘陵部分には萩ノ原遺跡、東郷台遺跡さらに遠寺原遺跡、それから最近県の文化財センターで調査を実施しました久野遺跡などといった山寺とか山林寺院的な性格が考えられる遺跡が集中して存在します。これらの遺跡の中から「仏」、「四仏」とか「寺」、「西寺」や「塔寺」とかいろいろな仏教関係の墨書土器が出てきています。年代的にはおそらく8世紀後半

から9世紀代が中心になってくるであろうと考えられます。この中でも望陀郡と周准郡の郡界の丘陵上に位置します久野遺跡、全体の写真と典型的な墨書土器を15ページに挙げておきましたが、そこで出てきている遺構・遺物を見ますと、この遺跡では丘陵の尾根部分では6棟の仏堂と思われる基壇建物が並んでおりまして、そこから「赤穂寺」という墨書土器、その隣接地点から「大般若」と読める可能性のある墨書土器が出土しています。もしも「大般若」と読めるならば、国分寺などでも当初の段階でその転読などで指定をされております大般若経との関係も考えられますし、さらに中世にかけて一般化していきます大般若会、これは民俗の方でも一般化してくる行事ですが、大般若会のような法会との関連も想定できる可能性もあり注目できます。また、萩ノ原遺跡、東郷台遺跡では北側に隣接します海上郡の初期寺院・二日市場廃寺の瓦が使われているわけです。今話しました久野遺跡でも直接的な瓦の系譜というのは明確にはできないわけですが、現在、整理を行っている段階では、久野遺跡でも、どうも木更津市の大寺廃寺、これは望陀郡の初期寺院ですが、ここから出てきている隅欠瓦（隅を落とした道具瓦）と類似した隅欠瓦が出てきておりまして、こういうことを見てきますと、山寺としての久野遺跡もこの辺の初期寺院と何らかの関係をもって成立してきている可能性が高いというふうに考えることができるわけです。この地域の集落遺跡の中から9世紀に入りますと香炉蓋や水瓶や浄瓶などの仏具が出てくる遺跡が見られるようになります。場合によって、初期寺院と今話をしたような山寺的な遺跡が連携し、さらに周辺の集落へと活発な布教活動を行っていた痕跡として認めることもできるのではないかとこのように考えられるわけです。

続きまして、今日の本題であります印旛郡・埴生郡の話に入っていきたいと思えます。上総国とは対照的に多くの墨書土器が出土しております。印旛東部・埴生郡では水系単位で初期寺院を核とした仏教遺跡のまとまりがある程度見ることができます。そこには規模の整った村寺から小規模な村堂に至るまで、各種の仏教遺跡が集落遺跡の中に比較的濃密に分布するというような状況を見ることができると思えます。例えば、根名木川水系では初期寺院の龍角寺が存在しまして、その水系沿いに「忍保寺」、「忠寺」などの墨書土器で知られる郷部遺跡や山口遺跡など比較的規模の整った村寺的な遺跡、さらにその上流には「桑田寺」の墨

書土器、ここは「罪司進上代」の墨書土器も出た、久野高野遺跡などの規模の比較的小さい村寺あるいは村堂などがあった遺跡が水系単位で存在する。さらに印旛沼の南側の地域では鹿島川、高崎川水系、12ページの図面を見てもらうとわかりますが、初期寺院の一つ長熊廃寺（高岡寺）が存在し、長熊廃寺を中心に古墳時代以来の拠点的な集落である高岡大山遺跡の中にやはり大きな村寺らしい遺構があり、さらにその奥に「白井寺」とか「坂津寺」などの墨書土器が出土した六拾部遺跡、坂戸遺跡など小規模な村堂の遺跡がやはり近接して多数存在するような状況が見られるわけです。このような状況は上総国の方とは多少異なった状況と言えるわけではありますが、ここで、追加資料の3番の方（P26下段）を見ていただきたいと思えます。印旛地区と言いますのは、言うまでもなく香取の海を挟んで常陸の方とも対応する地域でありまして、常陸の状況も含めて考えるべきではないかというふうに考えるわけです。そうすると香取の海の向こうではどのようなになっているかと言いますと、筑波山の山麓、土浦市周辺では最近千葉県内の仏教関連の村の中のお寺と類似した遺跡が多数見つかってきているという状況がありまして、印旛郡の状況というのはこの辺と関連させる必要があるだろうと考えられます。さらに、筑波山は9世紀初頭に天台宗の教祖である最澄と激しい教学論争を展開しました法相宗の徳一が布教の拠点として中禅寺というお寺を建立している場所ですが、そこら辺との関連も今後視野に入れながら検討していく必要があると考えられます。

一方、印旛郡の西部の方ではどうかと言いますと、こちらの方では先程から田形さんから報告がありました、下総国分寺と直接的な瓦で系譜が確認できる大塚前遺跡が存在し、そこに隣接する形で鳴神山遺跡、さらに南に下った形で萱田遺跡群が存在するわけです。萱田遺跡群の中でも白幡前遺跡や北海道遺跡では「大寺」や「勝光寺」などの墨書土器、さらに四面庇付の仏堂が展開しておりまして、規模の整った村寺の存在を考えることができます。このような状況は、印旛郡の中でも東側の部分、さらに埴生郡域のように、初期寺院と隣接しながら古墳時代以来の伝統的な村の中に仏教信仰が浸透していった印旛郡東部とは違った様相を想定することができるわけで、ここの部分についてはむしろ萱田地区の8世紀後半以降の集落の増加、さらに大塚前遺跡に見られる国分寺との直接的な系譜の関係という状況を総合して考えますと、一番最初に話

をした上総国の中でも山辺郡域の状況にある意味では類似した状況と見ることも可能ではないでしょうか。このように、印旛郡域の中でも東と西では様相が異なってきたことをここでは指摘しておきたいと思えます。

最後に香取神宮周辺の話をしたと思います。香取神宮周辺については先程栗田さんから吉原三王遺跡の紹介があったわけですが、これに関連して吉原三王遺跡の隣接部分で多くのお寺関係の墨書土器が出ております。多田寺台遺跡は、吉原三王遺跡の東側に位置する遺跡なわけですが、そこからは「小山田寺」もしくは「宝成寺主」という墨書土器、さらに多田日向遺跡では「多陸草寺」、もしくは「三綱寺」、「観音寺」といった墨書土器、妙見堂遺跡では「釈迦」、これは時代的には10世紀代のものなんですけれども「釈迦」という墨書が出土しています。年代的には多田寺台が8世紀代でも中頃にいくのではないかと考えているんですが、現段階では未整理なものですので断言は避けたいと思いますが、8世紀代から10世紀代までの間で確認でき、その間に活発な寺院の活動が香取神宮周辺でも予想することができます。その中でも特に、吉原小林遺跡と多田日向遺跡で「三綱寺」の墨書と三綱の一人であると思われる「寺主」を指すと思われる「宝成寺主」という墨書が多田日向遺跡で出ているわけです。これらの墨書から見ますと、これらの寺については組織的な僧侶集団の存在も想定することが可能かもしれないと思います。こういうお寺はどのような背景でできてくるかということですが、香取神宮と並び称される鹿島神宮につきましては8世紀中頃の天平宝字年間、後に箱根山を開く満願禅師という僧が鹿島神宮の神宮寺を建立しているわけです。ここで神前読経という神様にお経を捧げるという形の神仏集合信仰があるわけです。これに類似した形で8世紀後半頃に香取神宮の周辺に多数の寺院が形成されてくるというような可能性があるのではないのでしょうか。すべてのいろいろな実証の上での手続きを経ていかなければならないわけですが、各地域ごとの様相と特徴ということを要約させていただいて、後、いろいろな問題点についてはフォーラムの中に譲ることとして私の話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

司会

どうもありがとうございました。続きまして川尻さ

さんから「房総における律令の文書行政」について事例報告をお願いいたします。

川尻

千葉県立中央博物館の川尻です。よろしくお願いいたします。時間がおしておりますので、ごく簡単に概



川尻秋生氏事例報告

略だけをお話したいと思います。私は文献史学を専門とする者で、なかなか墨書土器と接点を見つけることは難しいと思いますが、少し郡というものを中心にお話ししてみたいと思います。展示の方にもございますけれども、下総国には三つの、しかも養老五年の戸籍が遺っております。一つは有名な葛飾郡大島郷の戸籍、もう一つは相馬郡、そして香取郡の戸籍が遺っております。一般に戸籍の作成と言いますと律令を重視すれば、国が作る、ここで言えば下総国ということになるわけですが、細かく実態を見ていきますと国とばかりは言えなくて、研究史のなかでも大きく二つに分けられるのです。郡の戸籍を作る機能ということも無視できないわけでありまして。その点を少しご説明をしておきたいと思います。展示の方にもございますが、紙継ぎ目には、裏に偽造を防ぐために戸籍を作った人物あるいは年号を書くわけです。葛飾郡大島郷の戸籍は、26ページに写真と積文がありますように、「下総国葛飾郡大島郷養老五年戸籍主帳无位刑部少俊」というふうに人名まで書いて、しかも郡の主帳が署名をしているわけでありまして。一方の相馬郡と香取郡につきましては、「下総国倉麻郡意布郷養老五年戸籍」、「下総国鉦托郡山幡郷養老五年戸籍」と書きまして、だれが書いたということを書いていないのです。同じ年で同じ国の戸籍でありながら書式に違いがあります。それからもう一つ、表の方をみますと、葛飾郡は料紙の一番下、地の空きと言いますが、その部分に横の界線を

書いていません。一方、相馬郡と鉦托郡は界線を書いています。それと相馬郡につきましては表の記載ですが、嫡子とか嫡女という長男・長女の記載をきっちり書くのに対し、葛飾郡の方はばらばらな表記です。一方、葛飾郡について言いますと、相馬郡・鉦托郡と比べますと、成年女子の数が男の1.4倍となっています。等々もっとあるわけですが、かなりの違いがあるわけです。こうして見ると同じ国の同一年の戸籍でありながら、相馬郡と鉦托郡とは非常に似ているわけですが、葛飾郡と相馬郡鉦托郡の戸籍に大きな違いがあります。特に葛飾郡で言いますと郡司が書いているという点が注目されます。全部が全部、郡司が直接提出したとは言いきれないわけですが、私は郡の造籍の機能ということを強調しておきたいというふうに思うわけです。そうすると、こういった戸籍を書くというのは郡司一人だけでは到底、無理でありますので、その下部にいる郡雑任といった人達が大きな位置を占めているということになります。具体的に言いますと税長・米長・書生のような者たちがたくさん郡家にいて、そういった者たちが多くの文書行政を行っていたというふうに考えていいだろうと思います。そうすると、実は墨書土器を書いていた人達についても、そういう郡司、あるいは郡雑任といわれる人達の関与が考えられるのではないかというふうに私は考えています。そこでその手掛かりとして、一番わかりやすいのが、何度も紹介されていますが、福島県いわき市の荒田目条里遺跡の墨書土器、それから木簡でございます。今、27ページにありますその人面墨書土器には、「磐城郡 磐城郷 丈部手子麿 召代」というふうに丈部が出てくるわけがあります。また、人面はありませんが、「多臣永野麿身代」という墨書土器もあります。ところでこの磐城郡の郡司というのは幸い文献史料から追うことができます。これは『続日本紀』の神護景雲二年でありまして、今まで丈部であった姓を磐城多臣というふうに変えました。としますと、人面墨書の丈部も大きな意味での磐城の多臣の一族であるということができそうですし、他にも荒田目条里からはたくさん木簡が出ておりまして、二号木簡、里刀自木簡と言いまして、郡司に支給されました田の耕作を命ずるために郡司が木簡を里刀自に下すというのがありますが、そこで「大領於保」というように、磐城を省略して書いているということから考えると、「多臣永野麿身代」という場合の多臣というのは、狭い意味での郡司の一族であろうと、大領に係わる一族である

うというふうに考えることができます。つまり、磐城の荒田目条里で見えますと、郡雑任、そしてより直接的には郡司の一族というものがこういった墨書土器の祭祀にかかわっていたことがわかってくるわけです。また、もう少し説明を加えますと、その15号木簡、27ページの白黒の写真がありますが、「貞□」、これは僧名であると思います。その下に「俗名丈部裳吉」というふうに書いてありまして、郡雑任の一族から僧侶を出していることがわかります。また、写真はありませんがその裏側には「大仏頂経」のような經典ですとか「千手懺悔過」というような法会を開いているということがわかります。やはり在地の仏教の担い手がこういった郡司、郡雑任たちであったというふうに考えられると思います。もう少し文献史料を見てみますと、『三代実録』の貞観8年5月8日条には、常陸国久慈郡の椿戸門主という人が国分寺の僧侶になっていたが、父親の久慈郡の権主政宮成という人が死んだために、父の職を継ぐために還俗しています。この椿という姓から考えますと久慈郡のやはり主体的な郡司とは考えられない。郡雑任レベルの一族ということになります。こういった人たちが国分寺の僧や写経生などとして都に出仕し、仏教などの宗教に触れる。そしてそれを在来の信仰とミックスして在地で祭祀を行う。また、在地と国分寺、あるいは在地と都の官寺をつないだ宗教者として位置づけられるのではないかというふうに私は考えているわけがあります。

最後になりますが、香取の海周辺から多文字の墨書土器が出土します。そこで、房総の多文字の墨書土器にみえる氏族名に眼を転じてみますと、印旛郡の丈部は、郡司として文献に散見されます。また、吉原三王遺跡の中臣部は、十一世紀以降の「香取文書」には、大中臣として香取郡は神郡ですから、香取神宮の、神宮と同一と考えられ、大中臣と見てよいだろうと思います。占部氏も、時代は降りますが、応保二年の「香取大禰宜家文書」に判官代として見えます。そもそも占部は、『常陸国風土記』香取郡条では、鹿島社の近辺に住み、後には中臣部とともに鹿島郡司の中臣鹿島連氏を形成する有力氏族でした。おそらく、香取郡でも同様な存在形態をとっていたと推測されます。一方、同遺跡の真髪部は、『今昔物語』で、常陸介源頼信が香取・海上郡付近に居住していた平忠常を攻撃する際、「香取の海」の浅瀬を案内した人物として見えます。「香取の海」の水上交通をつかさどるような氏族と考えられます。したがって、いずれも郡司・郡雑任

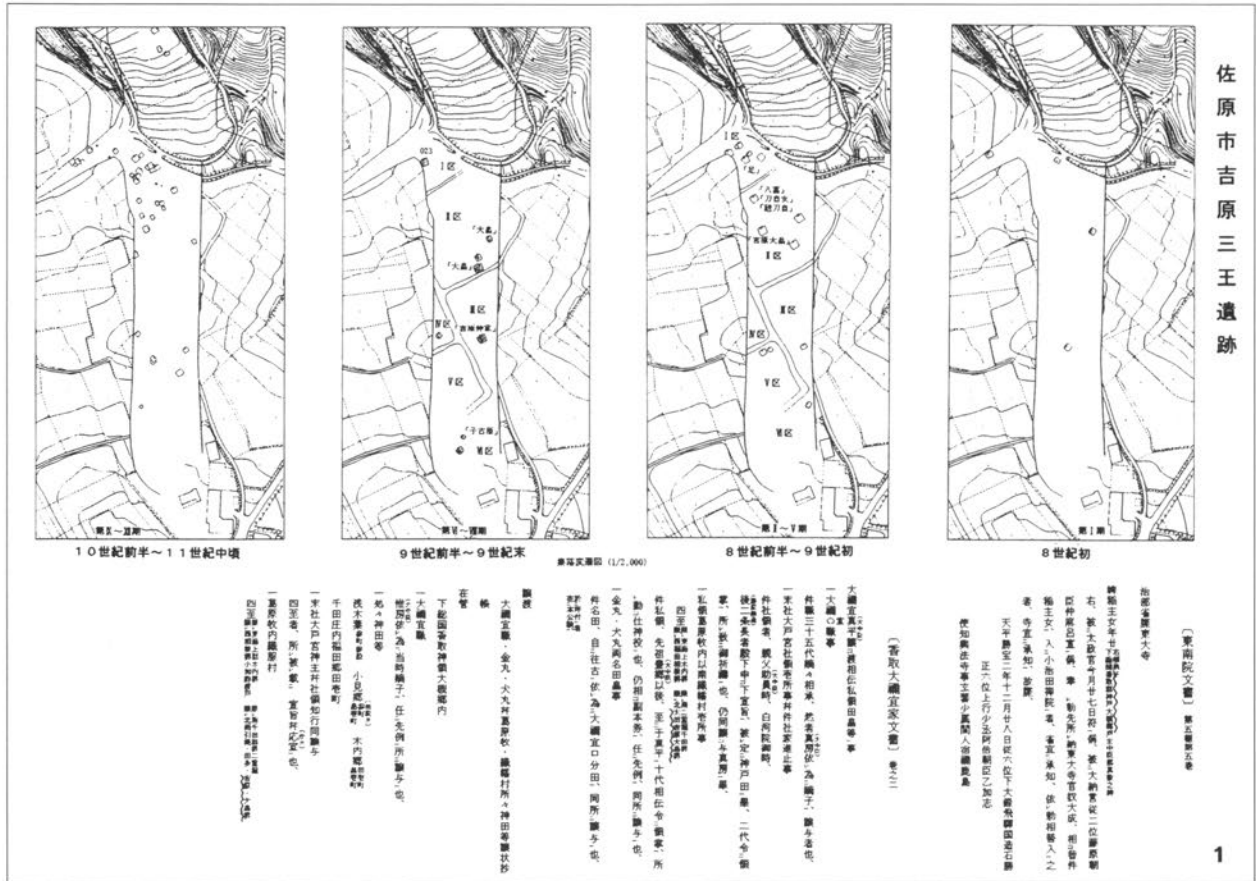
レベルと見てよいでしょう。荒田目条里遺跡での検討結果は、千葉県でも立証できるものです。

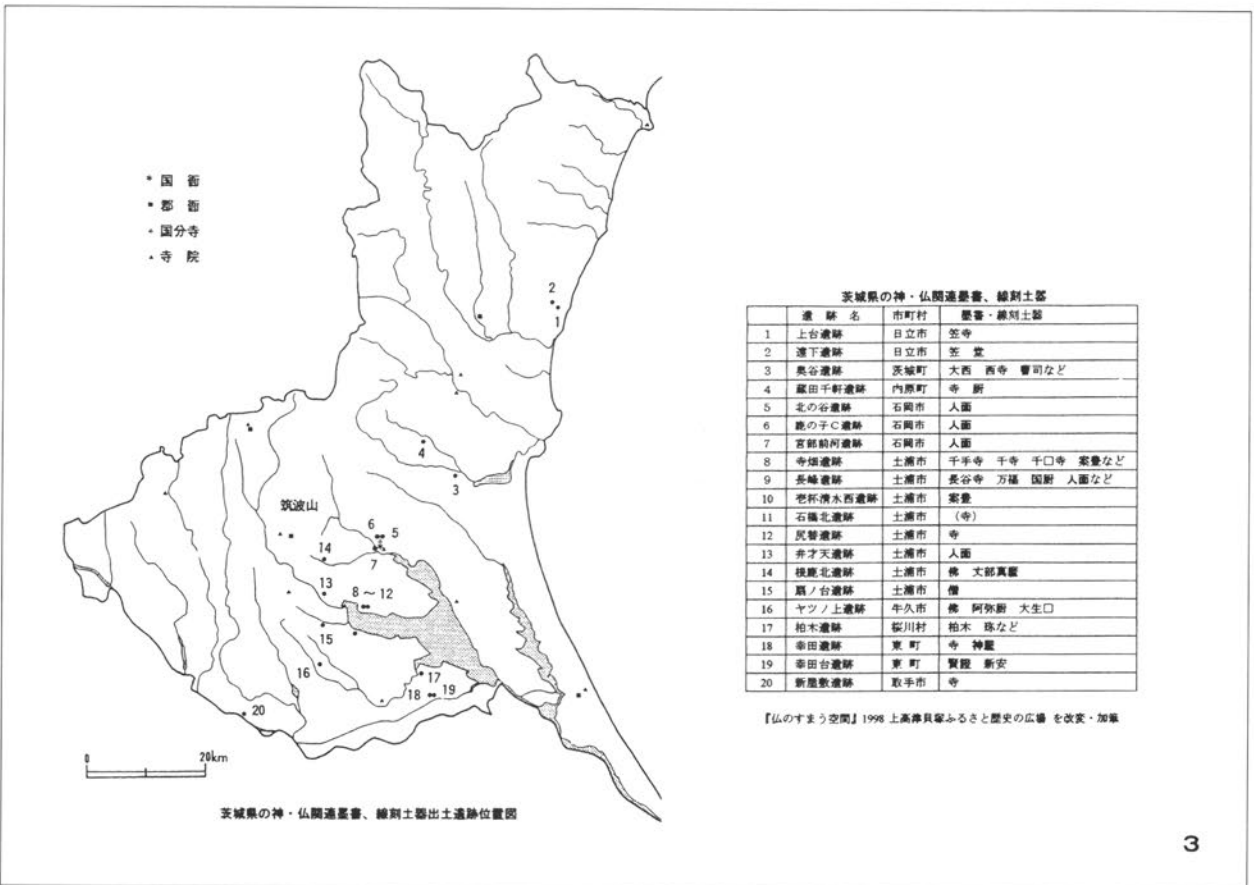
こういった国郡郷そして人名という表記は、木簡とかあるいは正倉院文書の中に数多く見出だされるわけでありまして。こうした表記はそれぞれの地域が、国郡郷という律令制の中に編成されて成立したものであります。こうした表記を郡司とか郡雑任は、日頃から何回となく繰り返して書いているわけでありまして。こうした祭祀自体は、外から訪れる神に対して、自分がどこに居るかという場所を書くことによって、神が自分の所に正確に来てくれるということを願っているのだらうと思います。こうした信仰自体は、なにも奈良時代とか平安時代とかに初めてできたものではなくて、前代から、もっと古い時代からあった客人信仰まればとに基づくものです。しかし、それだけでは多文字の墨書土器は発生しないのでして、そこに郡司とか郡雑任たちの日常的な文書行政というものが加わって、初めてここに人面墨書土器、あるいはこうした国郡郷プラス人名という墨書土器というものが成立したのではないかと思います。したがって、私は、正倉院文書ですとかあるいは木簡という一般的な文献史学の人間が

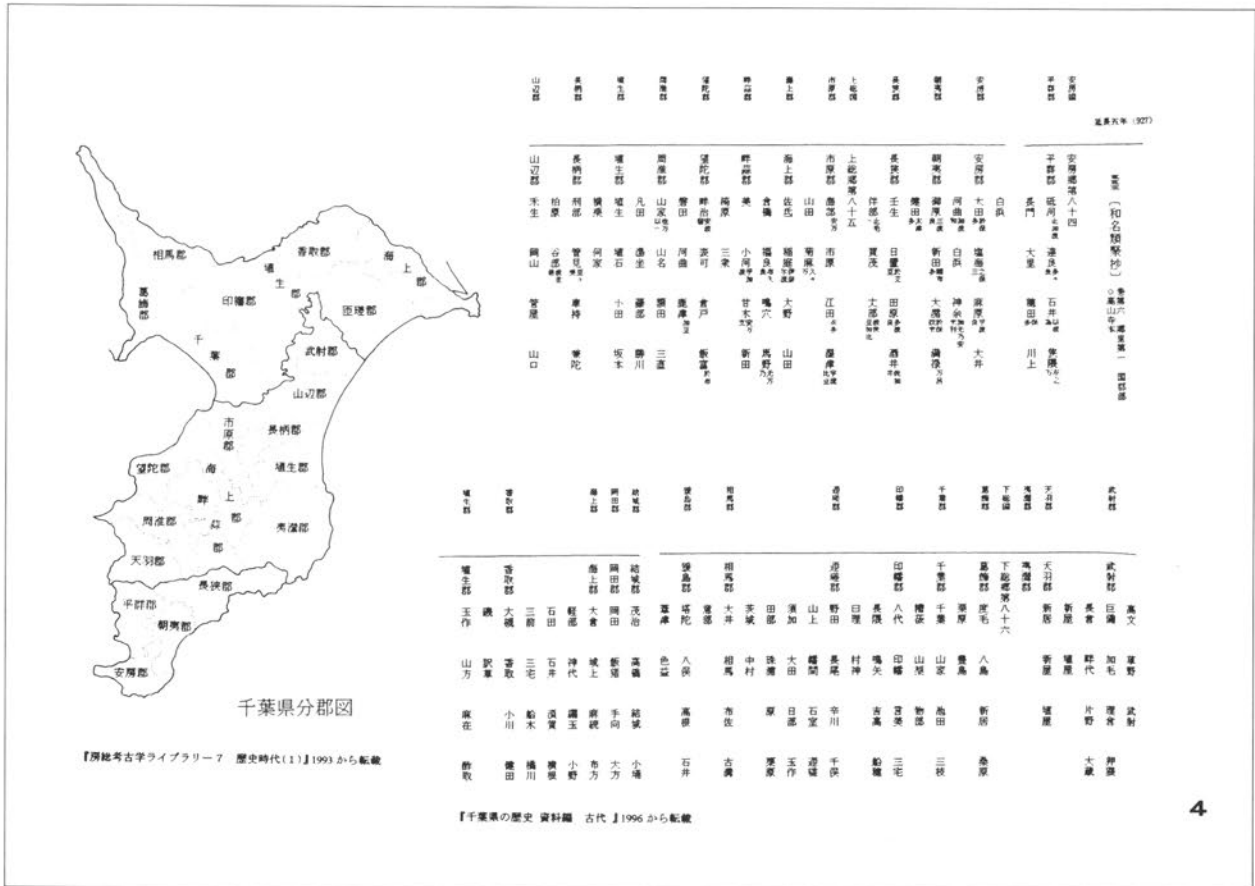
使うような史料と、こうした墨書土器というものも全く違った世界にあったわけではなくて、その延長線上にこういう墨書土器も十分に位置づけることができると思います。一文字の墨書土器がどうなのかということとはなかなか文献の側からは言いにくいわけでありましてけれども、こういう郡雑任たちが使っていた文字というものを媒介として、集落の内部でまねたり、なぞったり、そうした行為が行われたのではないかというふうに私は考えるわけでありまして。今日、お話をした戸籍の問題などは実際の展示物がございますので、実際に見ていただければありがたいですし、荒田目条里の写真なども展示してございますので後程ご確認いただければと思います。この辺で私の話を終わりにしたいと思います。

司会

どうもありがとうございました。以上をもちまして、平川さんの基調講演、それから5名の方々による事例報告を終了いたします。ここで休憩をとりまして、フォーラムを始めたいと思います。休憩時間が短くて恐縮ですが、よろしくお願いいたします。







3. フォーラム

司会

それではこれからフォーラムを始めたいと思います。平川さんの基調講演、5名の方々の事例報告で、およそ房総における墨書土器というものが、だいたいどういふものかということについてはご理解いただけたんではないかというふうに思います。これからのフォーラムでは幾つかの点について、また皆さんにお話をさせていただくような方向で進めていきたいと思っています。今回のフォーラムでは主として8世紀の後半から9世紀代の墨書土器を中心に話を進めていく予定でありますので、会場の皆さんにはそのへんをお含みおきいただければと思います。

それではまず、集落遺跡から多量の墨書土器が出ているということで、先程阿部さんからその辺りの話が合ったわけですが、千葉県全体で墨書土器というものが1万とか1万5千とか、いろいろと言われているわけですが、それが実数としてどのくらいの数が出ているのか、それが果たして多いのかということについて、遺跡の数を含めて阿部さんからお話をいただければと思います。



フォーラム風景

阿部

平成8年の段階の集計でおよそ455遺跡、10,800点程度であったと思いますが、その後現在までの3年間に蓄積された資料なんかを考えますと、大ざっぱにみても500遺跡、15,000点程度の墨書土器が今の段階で出土していることになるかと思っています。

司会

それは、関東地方の都県とか、あるいは東日本を含めた地域的な範囲の中で比較した場合、特段に房総の

場合は出土例が多いということが言い切れるのかどうか、その辺りについての具体的な例はありますか。阿部さんどうでしょうか。

阿部

やはり極めて出土資料数が多い地域であるということが言えるのではないかと思います。都道府県単位なんかで比べますと桁ぐらい違うような都道府県もあるのではないかと思いますので、関東地方の中でも際立って出土量の多いのが千葉県というようなことが言えるかと思えます。

司会

わかりました。集落から出てくる墨書土器は、多文字のものにつきましては、先程来の報告の中で、あるいは基調講演の中でいろいろとお話が出たわけですが、多文字以外の墨書に一文字ですとか、あるいは二文字ですとか文章にならないような墨書土器がかなり集落遺跡から出土するということがあるわけですが、このような墨書土器の解釈の仕方と申しますか、どういうふうに考えていけばいいのかということが大きな問題になるのではないかと思います。なかには地名を表すものもあるわけですが、大体のものが意味が通らないというものがほとんどだと思います。例えば集落を研究されている田形さんが見られた場合に、多文字以外の墨書をどういうふうに扱えばよいのか、どう考えたらよいのかということについてお話をいただければと思います。

田形

これは、今回多文字墨書や人面等を書き、比較的資料の内容がわかる墨書土器が今回のひとつのテーマと、もうひとつには一文字、二文字の墨書土器が一体何を表すのかと、ひいては平川さんの基調講演にありましたように、土器になぜ墨書をするのかというのが、本日の結論の大きなひとつになるかと思えます。今日お配りしました追加のA3判の資料(P25~P27)ですが、2枚目の資料(P26上段)です。これは平川さんや天野さんが国立歴史民俗博物館の集落の研究で進められて、墨書土器研究の突破口を開いた遺跡の一つと考えていますが、八千代市の村上込ノ内遺跡の集落分析のなかで墨書土器がどういうふうに出てくるか、どういう傾向があるかということ若干説明いたしましたので、全体的な説明の一つを考えてみたいと思えますが、

この中で墨書土器が単位を表すグループの標識の一つということで、詳細に検討されたわけで、それは「利多」・「来」とか、「毛」ですとか、そういったグループの中で継続的に長期間同じ文字を書き続けるという、それがそのグループで非常に明確に分かれるという、傾向が見られることを村上込ノ内遺跡で立証されて、それが集落の中の単位集団と申しますか、単位集団の中の標識を表す文字になっていくのではないかという分析をされたわけですね。こういう傾向は先程私の報告の中でも触れましたように、鳴神山遺跡でも認められますし、ある遺跡では、先程平川さんの話にもありましたように、同じ種類の文字をずうっと何百年も同じ字形で書き続けるということもあるわけですね。

それではそれが一体何なのかということですが、書いてあるものについては、杯、皿、碗ですとか、供膳形態が圧倒的に多くて、しかも土器は特にそれ自体は優品ではなく、日常的な土器に書いているということが一つ挙げられます。土器の種類を選んでもその種類の中身では選んでいないということが大きな事実として浮かび上がってくると思えます。それでもう一つは出土状況などもあるんですけど、その墨書土器で、墨書の部分を打ち欠いたり、意図的に割ったり、粉々に割ったりするという傾向があります。多文字で記した祭祀の内容を書いたものから、人名だけを書いた省略形態、さらには一文字二文字もそのまた省略と申しますか、その文字を書く理由は様々あっても、その文字を書くことによって、祭祀に使用しているのではないかと考えます。その文字を書いたのは、実は祭祀の時に書いたものではないかということです。その土器については、その祭祀をする段階で墨書することによって日常性を脱却させてしまい、非日常的なものになっていくのではないかと申しますことも想定されるわけですね。ですから一文字二文字のものが結果的に同じ文字をずっと書く、そういったことも含めて、地名を書いたり、人名を書いたり、先程平川さんがおっしゃった「豊」ですとか、種類の少ない文字を書き続けるという行為自体が、何らかの祭祀行為と結び付いているのではないかと考えます。もう一つには年紀を書いたものもありますが、それはその祭祀を執り行った年号と日付ではないかと考えられるわけですね。

一文字二文字の墨書土器についてもそういう意味で、多種多様な祭祀があって、すべてが冥界への賄賂を示しているものではなくて、阿部さんの発表でもありましたように、竈の祭祀とか、祭祀の形態は集落の中に

おいて様々なものがあり、それは伝統的にずっと以前からあって、その中で文字を書く祭祀が伝わった時に墨書土器として現れて、結局それが廃棄されたり、祭祀行為のままであったりする状況で遺跡の中に遺っていくのではないかとこのように私は考えています。長くなりましたが以上です。

司会

そうしますと、一文字二文字の文字を土器に書くということ自体が土器を非日常的なものとして扱うことになり、そこに祭祀が見られるのではないかとこのお話だと思います。

先程来から話が出ております多文字の墨書についてはいろいろと解釈ができるわけですが、今、お話いただいた一文字二文字の墨書土器の中に、例えば「国玉」など神を表すような墨書や仏に關係するようなものもあります。それからなかにはまじないにつながると考えてよいものもあるわけですが、その辺りについて何人かの方にお話をさせていただければと思います。まず、阿部さんからは先程のお話で香取神宮との絡みで、神に關する墨書についてお話をいただければと思います。

阿部

神に対するお祭りを行ったという内容を示す墨書土器の中で、表されている神というのがどういう神であるかという点につきまして、「国玉」、「国神」、「国玉神」というように表記されているもの、おそらく古墳時代以来の在地の神への根強い信仰があったんであろうと、そういった神、昔から伝統的に祭りを捧げてきた在地の神様への執着が強かった分、印旛郡内、あるいは私の図（図録P18）で出しました印旛郡内の三つの神社というものに結びついていくのかなというふうには考えております。仏、まじないなんかについては私の方ではわかりませんが、もう一つ「竈神」というのが芝山の方で出土していますが、その「竈神」については、竈に宿る神様、これは極めて外来的な古代中国の方から伝わってきたような道教のようなものに關係する神様なんではないかというふうに思います。

司会

ありがとうございます。それでは仏やまじないの關係、あるいは先程道教という言葉も出しましたが、その辺りについて笹生さんからお話をいただければと思います。

笹生

仏の關係については信仰内容を含めてということでもよろしいでしょうか。仏の墨書土器については、「寺」や「仏」などの単純な文字もしくは寺の名前を書いたものが比較的が多いのですが、どのような場所に使われたかによってかなり内容が変わってくるのではないかと思います。このことについて一言お話しておきたいと思います。

例えば、今日、お話した中に、山の中の山寺的なお寺、これは比較的きちんとした仏堂を伴っているタイプの山寺ですが、それから拠点集落など大きな集落の中に比較的きちんとした四面庇の建物をもって出てくる村寺、さらに本当にお堂だけ、もしくは瓦塔だけが集落の中に作られるタイプとか、仏教關連の遺構でも明らかに階層性が見られるわけです。これは何を反映しているかという、そこにおける仏教の儀礼内容をそのまま反映をしてきている可能性が考えられます。山寺等については文献でよく見られるような吉祥悔過とか十一面悔過や千手悔過のような悔過法や延命法というような、いろいろな修法を行うような施設として活用されている場合があります。これについてはかなり専門的な僧侶がそこに入って実際の修法や悔過を行ったりするわけです。また、村の比較的大きなお寺も、村の中でそういう悔過を行ったり法会を行う場として機能したとも考えられます。実際『日本靈異記』のなかでも都の大寺・薬師寺の僧侶などが村に呼ばれて行って法会を行ったりする例が確認できますし、今日、川尻さんの報告にもありましたように千手懺悔過のようなものも在地で行われているという、村の比較的規模の大きい仏堂の中では悔過のような法会を行う場合もあったのではないのでしょうか。そうするとそこには大寺院から僧侶が呼ばれてきて、そこで法会を修するというような形態があって、その段階で墨書土器が作られるというような場合も考えられます。

それとはまた別に、村の小規模なお堂の中で、少しランク的に下の僧侶や村人が読経や礼拝を行うことも考えられます。千葉県内の例ですが、天平年間の「優婆塞貢進解」では富津の天羽郡の優婆塞はすでに幾つかの陀羅尼を知っているわけです。優婆塞は僧籍にはまだ入っていないわけですが、そのような人が8世紀の半ば頃には陀羅尼を修得しているわけです。荒田目条里遺跡の木簡の中にも陀羅尼の種類を書いたようなものがあり、村の中では単純に陀羅尼を唱える程度の仏教儀礼というものもあるのではないかと思います。

つまり、非常に高度な仏教的な内容をもつお寺、山寺的なもの、その外側にしっかりした村寺的なものが同心円的にあって、さらにその外側にお堂的なものがある、それぞれにあった形での仏教儀礼が存在した。ある意味では外にいけば外にいくほど性格的には神様を拝むのと同じレベルでの仏様の信仰というような形になったのではないのでしょうか。単純に仏様だからすべて仏教というわけではなくて階層的な在り方を考える必要があるでしょう。

例えば今日お話した山辺郡域では一番西側の土気地区はある意味では国分寺と直結した山寺や修行場、その外側に広がる初期荘園的な性格の大網山田台遺跡群では比較的大きい村寺が存在し、村人と山寺の僧侶が連携を持ちながら仏教儀礼が行われる。さらにその外側には古墳時代以来からつながる久我台遺跡とか作畑遺跡という遺跡が存在する。そして、外側にいくほど小規模なお堂しか出てこない傾向があるとも言えます。僧侶についても常住する僧侶はいなくて資料の方には挙げておきましたが「弘貫」というお坊さんがたまにくる程度というような形であったようです。仏教儀礼・信仰の内容は空間的にもかなり差をもって分布していたのではないのでしょうか。一番外側の一番低いレベルの仏教信仰と言ってしまうと問題があるかと思いますが、もともと外縁の単純な仏教信仰というのはある意味では道教信仰や神信仰と同じレベルで扱われていている可能性がありますし、道教や神信仰とまさに混在するような形で印旛郡の中の村々では信仰されていたのではないかと思います。

そこに入ってくるのが先程平川さんの方からも最初の基調講演で説明のありました、井桁の「臨兵闘者皆陣列在前」という九字切などのまじないです。これもやはり9世紀代に広範囲に見られますので、低いレベルの仏教信仰と混在して存在していたと考えられます。つまり、レベル的に最も低い一番単純な信仰レベルの中では道教的なもの、仏教的なもの、神道的なものは同レベルで混在した形で存在していたんじゃないかと考えられます。そういう形で当時の信仰内容は階層的に理解する必要があるんじゃないかと思います。

司会

階層的な信仰の形態があるということですが、実際の集落で生活をしている古代人にとって、明確な意識があって、使い分けをするというような認識もっていたのでしょうか。難しい所でしょうがその辺に

ついて話をしていただければと思いますが、笹生さんいかがでしょうか。

笹生

かなり難しい話なんですけど、村の中でどの程度のクラスに属する人物かによっても異なってくると思います。現在の段階では明確には言えないですけど、同じ集落の中でも、仏教信仰を素朴・単純に考えている人と、ある程度の教義を知っている人とは明確に差があって、教義を知っている人にとってはかなり意識をして仏教経典を理解した上で法会を営むというようなことがあったでしょう。それ以外の人についてはかなり自然な形で神様仏様は同列ですというような形で信仰しているというのが実情ではないかというふうに思います。

司会

ありがとうございます。集落と寺院との関係が当時あったということですが、それに関連して、例えば下総の場合に下総国分寺と大塚前遺跡の関係について、事例報告の中にもありましたが、仏教思想というものが集落の中にどんな形で入り込んでいくのかということについて笹生さんから話をいただければと思います。

笹生

大塚前遺跡については鳴神山遺跡の報告をされた田形さんの方からも仏教信仰については幾つかの指摘がありました。瓦が下総国分寺と直接的に関係が認められるということで、少なくとも大塚前遺跡については下総国分寺の影響のもとに成立している遺跡であるということは確かだと思います。上総の方の遺跡の在り方から見れば、大塚前遺跡も今まで遺跡でなかったような所に急に四面庇付の建物と僧坊的な長細い竪穴住居が出てくるという特徴的な遺跡でありまして、私が考えている在り方から見れば上総で見られる山寺的なものに近い遺跡ではないかと考えています。山寺と言いきってしまうのはなかなか難しいと思いますが、立地的な状況や年代的な傾向を含めて山寺に近い状況で、そして南側に立地している鳴神山遺跡や萱田遺跡群というのは、その山寺の布教範囲に入ってくる集落として捉えることができるのではないのでしょうか。これはまだ遺物の上で確認はされていないわけですが、十分その大塚前遺跡の僧が、鳴神山遺跡については大

塚前遺跡と指呼の間に見える集落ですからまるっきりあそこの集落にいつてはいけないという形で孤立していたとは考えられませんので、そこら辺で当然国分寺に何らかのつながりをもった寺と隣接にある集落というものはかなり強い関連性、具体的に言えばお坊さんの行き来が実際にあった可能性があるんじゃないかと思われまふ。ですから先程も言いましたような『日本霊異記』の話で出てくるような大寺院の僧侶を集落に招いて法会をやるというようなことも実際に行われていたであろうと思われまふし、萱田地区の白幡前の四面庇の建物など比較的規模が整った仏堂が村の中であるわけですので、そこら辺ではある意味では本格的な法会を実際にやっていた可能性はあるんじゃないかと思ひます。そして、法会をやる僧侶はそこら辺の坊さんではなくて下総国分寺と関連をもった大塚前遺跡あたりからの系譜を引くことも可能ではないか、今の段階では断定はできませんがそういう可能性を示唆していきたくと思ひます。

司会

ありがとうございます。今のお話は印旛沼の西側の地域と言つていいのではないかと思ひますが、それに対して印旛沼の東の方、千葉県でも最も古い時代に建立されたと言われている龍角寺というお寺があるわけですが、その印旛沼の東の地域ではどんなような状況があるのか、お寺と集落との関係などについて、阿部さんからお話いただければと思ひます。

阿部

7世紀後半といわれています龍角寺の創建、そこを核として笹生さんのまとめられた資料を見まふと、非常に西側の下総国分寺、あるいは大塚前遺跡というような関係とまた違った比較的まとまった小規模なお寺が水系単位にまとまるというような特徴があるかと思ひますが、この背景については、笹生さんどんな形で考えればよいのでしょうか。

笹生

これについては先程話まふしたように水系単位の古墳時代以降のまとまりというものがベースにあるだろうと思ひます。根名木川、高崎川、鹿島川、さらに手賀沼東岸という地域があるわけですが、そこにはそれぞれ7世紀代以来の初期寺院が存在し、それ単位でまとまってくるということはやはり、古墳時代以来の地

域的なまとまりをベースに考える必要があります。そして、その中に仏教信仰が入つてきている、ですからある意味で在地的な神様レベルと同じようなレベルでの仏教信仰が一般的なのではないかと考えているわけです。

司会

そのような視点で香取の海の周辺地域に、香取神宮という大きな神宮があるわけですが、そのすぐ近くに吉原三王遺跡という、先程栗田さんの方から事例報告があつた遺跡があるわけですが、その周辺に幾つかの仏教関係の遺跡がありますが、吉原三王遺跡と周辺の遺跡との関係について、墨書土器を通じてどのようなことが言えるのか、共通点が見られるのか、あるいは全く関係がないのか検討することによって吉原三王遺跡の在り方を考える上で参考になるところがあるのではないかと思ひますが、栗田さんはどう考えているのでしょうか。

栗田

香取神宮の周辺では幾つかの調査が行われておひまして、寺に関係するものといたまふしては、先程笹生さんの方からありまふしたように、吉原三王遺跡から東の方にいつたところ、佐原市多田日向遺跡から「多陸草寺」とかあるいは実際の宗教に踏み込んだ形の「三綱寺」、「観音寺」、小見川町妙見堂遺跡の「釈迦」といつたものが展開しています。この地域は図録の22ページになりますけれども、古代の地名に小見川町古屋敷遺跡、御座ノ内遺跡の両方から「山幡」という墨書が出ておひまします。実際に展示をしておひましますが、これが先程から房総に遺つている三つの戸籍の中のうち、鉦托郡山幡郷の戸籍、山幡郷を示すものですが、先程言ひました寺につきまふしては、山幡郷に一番多いと思ひますが、そこから香取神宮に向けた形のところに展開をしている。いずれにしても山幡につきまふしては現在織幡という地名が遺つているんですが、おそらくこの辺に比定されるのではないかと思つておひまします。

そこは中世の香取文書の中において、香取郡の神領として認識されているところでござひまふして、香取神宮の領地内でありながらもかなり具体的な内容を示すような寺名の墨書土器が出ておひまします。先程笹生さんの方からありまふしたように、寺の建物のみで構成されている部分もありますので、そこが山寺となるのか、修行の場になるのかということとはござひまふしますが、いづ

れにしましても香取神宮の領地内にそれだけの寺が構築されている、造られているということになります。先程満願禪師の話がありましたけれども、鹿島神宮に満願禪師により神宮寺が建てられる、それと同じような様相が香取神宮にも考えられることから、かなり早い段階に仏教的な影響を神宮らが受けて、それでもって仏教が神宮の領地内に広く展開していくといったようなことが考えられると思います。それを吉原三王遺跡と実際どう関連させるかと言いますと、吉原三王遺跡では寺に関係する墨書は出ておりません。ただ、今回の資料にはのせてありませんが、すぐ隣を香取郡市文化財センターが調査をしまして、そこからは「寺」という墨書、建物として四面庇をもつおそらく寺と思われるような建物が出ておりますので、吉原三王自体もう少し広く調査すれば、寺というものを付属的な形で取り込む可能性はあると思います。

司会

ありがとうございました。さて、先程から香取の海という言葉が出てきていますが、現在の霞ヶ浦とか利根川河口から大きく入り込んできている内海というものであったというふうに考えられておりますけれども、この香取の海について川尻さんから具体的に説明をしていただければと思います。

川尻

香取の海というのは、印旛沼、手賀沼水域が古代・中世では一つにつながっていて、非常に大きな内水面を形成していました。当然現在の利根川の流路も違いますし、「海のごとし」とか、大海のようであるとかというような言葉で表されています。そこには阿部さんもご指摘なされた五斗時の文字瓦「水津」のように水上交通が非常に発達していたのです。

司会

その範囲というのはどうなんでしょうか、この図録の中に地図（図録P17）が入っておりますが、香取の海として示されておりますが、だいたいこの辺りという形で理解をしておいてよろしいんでしょうか、どうでしょう。

川尻

中世の文書しか遺っていないのですが、『香取大禰宣文書』の中に「海夫注文」というのがありまして、

南北朝の時代ですが、それから見ますと香取郡全域に神宮の親玉とっていただければと思いますが、それが支配している津が点々としている、それが今の霞ヶ浦から神崎辺りまででしょうか、そこに多くの茨城県側を含めて津があったと書き出されておりますので、その点中世の史料から追うことができると思います。逆に香取神宮の支配はそこまでであったと、津がそこでなくなったということではなく、印旛沼には別の形で支配される津が中世にはあったということが言えるんだらうと思います。

司会

ありがとうございました。房総半島における墨書土器が香取の海や印旛沼周辺に非常に多いということですが、なぜその地域に墨書土器が集中しているのか、なぜ多いのかという理由や、どのような人が墨書土器を書いたのかということを考えていかなくてはならないと思います。その辺について平川さんのからお話をいただければと思います。

平川

この香取の海周辺に墨書土器が飛び抜けて多いということは、全国的に見ても明らかな傾向としていえるのですからそろそろそれについての解答が必要な時期ではないかということで、近年千葉県内の研究者はいろいろな形でこの点について検討を加えているのですが、一つは先程から出てきておりますが、神もあれば仏もあるという様々なものが出てくるわけですが、その一方で、日本の最古の仏教説話集といわれる『日本霊異記』という書物の世界ともいろいろな点で合致するわけです。そうすると今日聞かれた方も多分いったい何なのかと大変疑問に思われるでしょうが、実は日本には元々神祈祭祀の中では個人信仰とか現世利益は中心的な存在ではなく、むしろそういう点では中国において、密教とか俗信的な道教みたいなものの方が現世における延命行為のように延命祈願をして命を長らえる信仰が非常に強かったのです。冥界という思想の基本的なものができあがったのは中国です。中国における冥道世界を端的に沢田瑞穂さんが表現されている文章がありますので読んでみたいと思います。「中国歴代社会・文化の隅々までに浸透し、それを地下水として異様な習俗や文明を花咲かせている。それはすべて伝説から流れ出たものというわけではなく、むしろ死後の世界に関する中国人の古来の俗説の刺激によっ

て触発され、仏教とも道教とも一般信仰ともつかぬ混合した相で現れたものと見るのが妥当であろう」。私はこの冥道世界というのが日本に取り入れられたと思っています。しかしそれがまたストレートではなく、日本には日本の在来の俗神の信仰があり、それにそういうものが加わるわけですから、非常に複雑になるのです。受容する側は要するに日本でも現世でいかに利益を受けるかという一点にしばった時に様々なものを受容した。ですから人面土器という話が何回か出ましたが、これも元々道教に伴って日本に入ってきた。しかし都で行われる都市のお祭りは、これは完全に水辺の祭祀、つまり厄払いの祭祀、ですから必ず人面土器がでるのは水辺からしか出なく、地方の国府でもそれに習い、茨城県石岡市の常陸国府とか宮城県多賀城の陸奥国府周辺とかで出るときは、川とか池とかいう所から出土する。ところが関東各地で出土する台地上の人面土器は竪穴住居で、水とは全く関係のない所に廃棄されているということからも異質なものと見ることができ、しかも用いられる土器も都や国府ですと甕に自分の悪気を吹き込んで蓋をして水に流すという祭祀形態なのに対して、関東各地のものは台地上ですからむしろ甕を使わないで坏を使って、坏に顔を書いており、坏はものを捧げるという器種ですから、そういった点でだれだれがご馳走を盛ってなににの神様に捧げるときにはじめて書かれる。人面土器祭祀にしても都と集落とでは異なっており、そこには非常に古代人の遅しい、自分の都合に合わせた形で様々な宗教を取り入れていくということが見られます。それが外来であろうと在地であろうと混合した形で作り上げていったのが古代の何ともいえない信仰形態で、これらの墨書土器がその世界を表しているというふうに見ているわけです。そこから考えていったときに初めてこの香取の海周辺で集中して出ることの意味に関わってくるのかと思います。この点については先程阿部さんから説明されたように、大和朝廷の東国支配のいわば精神的な拠点を香取・鹿島においたのですので、意識的に墨書土器の中に「国玉神」、「大国玉神」というような形で出てきます。一方では、最新の大陸から入った道教的なものを入れながら一方では「天神」というような香取神に対する抵抗のようなことも考えられる。そういったものを受容したのは一体だれなのかと言うと、畿内の方から自然に流れてくるようなものではなく、受容する側が選択をするという、都合がよければ受けるし、都合が悪ければ拒否するということで

はないか。そういう面からみると印旛沼一帯で大きな勢力をもっていた丈部直という人物ではないか。ウジ名からしても元々が、稲荷山鉄剣での杖刀人と同じ意味あい、つまり武力をもって大和の大王家に仕えた「杖刀人」ということをその氏名で標榜しているのです。丈部という、木偏をとっても同じ意味ですから、杖という字です。ですから丈部は武力をもって仕え非常に大和と強い関係をもち香取の海という水上交通を利用して、積極的な外来文化を受容しながら、しかもそこで国玉神への信仰という自立的な色を出したのではないかと考えております。この辺は非常に歴史的に大きな問題ですのでこれから様々な意見が出るかと思いますが、現在私はそのように考えているのです。

司会

ありがとうございました。川尻さんの事例報告の中に、税長とか米長とかの郡雑任といった者の文書行政と墨書土器とが関係をもっているのではないかというお話があったかと思えますけれども、その辺りもう少しお話をいただければと思います。

川尻

先程荒田目の例を使ったわけでありまして、ご存じのように印旛郡司は丈部であります。もう一つ問題になりますのが、栗田さんの方から話があったかと思いますが、吉原三王の多文字をどう解釈するかについては問題になりますが、司ははっきりとわかりませんが、11世紀12世紀ぐらいの史料に、大中臣が神官として出ておりますし、占部も一緒に出ております。それは『常陸国風土記』の鹿島郡の氏名とまったく同じであります。そういうことから見ると、荒田目で見たのと全く同じような傾向が房総半島の香取郡や印旛郡の内でも見られるのではないかと現在のところ考えております。ただし、それがなによえ「香取の海」周辺に限定して見えるのかという点については、はっきりわかりません。ただし、古墳時代の石枕の副葬にみられるように一つの文化圏を「香取の海」というものが形作っていて、形を変えて8世紀9世紀にも残っていくということが十分予想されるのではないかと考えております。

司会

ありがとうございました。それに関連して図録の中で阿部さんの神へのまつりとの関係の中で、丈部と海

洋民ということを指摘されているわけなのですが、そのあたりご説明をいただければと思います。

阿部

これは現在出ている丈部という名前が書かれた、「神奉」あるいは神への祭りと関係する墨書土器、あるいは人面を伴う墨書土器に書かれている氏名というのは、丈部と人面と神への祭りとというのが結び付いた状態で今のところ出土しておりまして、それがいずれも香取の海を中心とする沿岸部、あるいは九十九里側の沿岸部、芝山の庄作遺跡なんかの一点はそちらの方になるかと思いますが、それとちょっと飛びますが磐城の荒田目条里遺跡で出ている人面プラス丈部の名前、それから召代。こういったもの。それから今日の参考資料で一つA3の資料（P26下段）で3番目に茨城県の墨書の関連遺跡の位置図がありますが、これにも同じように5,6,7それから13が人面、14番の丈部真磨があって、いずれも霞ヶ浦周辺ということになりますので、こういったことを考えますと、出土した遺跡の共通性から考えまして、極めて特徴のある祭祀内容を示す土器と丈部の関係、その出土遺跡の立地なんかを考えるとこういった祭祀を行った丈部、あるいはその丈部氏という集団が水上交通にかなり深く係わった氏族ではないかというようなあくまでも推測なんですけど、今後同じように各地で古代の津、つまり港の近くでこういった資料はまた増えてくれば、そういう推測も次第に証明されていくのではないかとこのように思っております。

司会

そうしますと、一つの見込みになるとは思いますけど、印旛沼の西側の方、奥の方で津の存在する可能性についてはどんなふうな見込みがたえられるでしょうか。

田形

遺跡で立証されておられないのでなんとも言えませんが、印西市に船穂という地名がありますが、津に関係する郷名ということも考えられます。もう一つは平川さんの講演の中でも出ました八千代市の上谷遺跡というのがありますが、それも村神郷の北辺の方だと思いますけど、かなり印旛沼に近い位置で印旛沼から大きな谷津が遺跡の方に入り込んで所在するわけです。残念ながら谷部が調査されておられないので具体的な津の遺構とかは見つかっておりませんが、「コ」の字形

配置と言いまして、いわゆる官衙、役所的な配置を示す掘立柱建物群とかが見つかっておりますことから、遺跡としては一般的な集落より、もう少し内容的に充実していますので、そのような遺跡が立地している谷部には津の存在が考えられると思われまして。

今のところ遺跡として確実に想定ができませんので何ともいえませんが、いずれにしてもそのような遺跡で考えることができるのではないかと思います。

司会

ありがとうございました。今、津との関係でいろいろな地名の問題という事を考える必要があらうかと思いますが、平川さんの基調講演の中にも地名に関するお話がだいぶありましたが、小見川町の古屋敷遺跡や御座ノ内遺跡から「山幡」という地名と関係のある墨書土器が出ていますが、この墨書土器の意義について栗田さんからお話をさせていただければと思います。

栗田

先程少し触れましたけれども、22ページのところにあります「山幡」でございますが、これにつきましては、文章のなかでも若干触れております。26ページにのせてありますが、正倉院文書の中に、この墨書が出るまでは、下総国香取郡少幡郷という形で判読をされておまして、以来それが香取郡少幡郷ということで認識されていたわけですが、この「山幡」という墨書がいくつかの遺跡から出土しています。古代では「山」と「少」という字は非常に似た書き方をします。「山」という字は読み方によってはこれを「少」という字を続けて書いたものというふうにも読めるわけですが。当時はそういったことで「少幡」と読んでいたわけですが、この「山幡」墨書土器の例からも明らかに「山幡」郷ということになるとは思います。この「山幡」郷に関しましては一般に使われます『和名類聚抄』、古代の国、郡、郷名を書いたものにはのっていない郷名として明らかになった墨書でございます。

それに類似したものとして、長屋王の邸宅から出ました「上総国武昌郡高舎里」があります。これについては、上総国武射郡を当時はこのように書いてたことを示しています。また、高舎里は隣の郡に高文郷というのがありますが、郡をこえてるためどこになるのかわかりませんが、いずれにしてもそういった形で『和名類聚抄』にのっていない、文献史料にのっていない地名というものがこういった墨書土器から考

えられることもできるわけです。それ以外にも、そこにのせておりますが、展示しております大袋腰巻遺跡の紡錘車に「ツ牟郷」と書いたものがあります。おそらく印旛郡になるかと思いますが、現在知られている郷名には見られないもので、当時は『和名類聚抄』等で確認される郷名以外にもかなり多くの郷名や地名が当時は一般的に使われていたのではないかと思います。

司会

ありがとうございました。まだまだ皆様方にいろいろなお話しをしていただきたいと思いますがそろそろ予定の時間も迫ってきておりますので、最後のまとめという形になろうかと思いますが、最初の平川さんの基調講演の中で、8世紀から9世紀に盛行をみた墨書土器が大体10世紀頃で消えていくというお話がありました。このことについては別途論文をお書きになっているとのことで、それを拝見させていただければと思いますが、できればそれに先立ってその文字の終わりということについてお話しいただき、まとめにさせていただければと思います。よろしく願いいたします。

平川

これが正しいかどうかはこれから検討をしていかなければならないのですが、まず墨書土器はなぜ書き始めたかということは今日皆さんから報告していただいたように、縄文弥生から人々は神々に深い信仰を寄せて願ったけれども、文字は書かなかった。文字を書くようになったのはあくまでも東国社会では8世紀～10世紀ぐらいまでですが、その大きなきっかけはやはり律令の文書行政であると考えられる。勿論それを見様見真似で書いた人達が周辺にいたというから、初めて文字によって神々と対応し、しかも書かれた内容は非常にストレートに文書行政そのものの簡略な形をそのまま書いており、多文字の場合も一文字二文字の場合にも大体共通した信仰に基づいているのだろうというふうに考えております。

当然今度は、なぜ10世紀ぐらいを境にして全国的にほとんど文字が書かれなくなったのか、中世とか近世の陶磁器に書かれたものはそういう面で社会の全体像を探る意味では、大きな要素になってはいないというふうに考えてよろしいと思います。そうしますと我々としては墨書土器が消えたということについての結論を出すことが重要な仕事である。そこで考えられるの

は、集落においてはある種の信仰形態に伴って記すという行為が基本だろうと思われる。先程集落の標識文字の話もありましたが、それも集団内での一定の祭祀に伴って書かれたという点では共通するだろうと思います。それから官衙、役所における墨書土器というものは、これはいろいろな饗宴に係わる儀式に伴って書かれたものであろうと考える。そうしますと消えていく原因は、まず一つには信仰形態、集落のことを考える時にやはり信仰の変化というものが一番重要ではないか、それは仏教を中心とした変化を見ていけばおそらく解けるのではないかと思います。ちょうど10世紀くらいから浄土信仰が非常に盛んになってきて、それまでは当然仏教にしても奈良の仏教、その後に出てきた天台、真言でも非常に厳しい修行と高い教義・経典を理解しなければならないようなものであり、これは一般庶民にとっては遠い存在であったでしょう。ところが10世紀半ばぐらいになると今度は阿弥陀仏の信仰、それから来世に対する極楽浄土ということ願っての浄土教が新たに出てくる。やがて鎌倉時代に入るところには、浄土宗や日蓮宗など様々な新しい仏教が、難しい教義・経典を修行をすることなく、厳しい戒律や学問、あるいは経済的にも寄進というようなことをすることなく、念仏や題目を唱えることだけで救われるという。こういう新しい仏教の台頭というのは、当然これまでのような在地における仏教あるいは道教のようなものを中心とした土器にご馳走を盛ってそして本当に達せられるかどうかかわからないような願いを必死にやっていた信仰形態を打ち消すに余りあると言いますか、そういうものにとって代わることでできる新しいものが一般庶民に広がっていったときに、もう墨書をして願いをするという形はなくなっていくということではないかと思います。一方、官衙においても、郡家や国府あるいは宮殿内における一極集中の儀礼空間を設けて、あるいは国府や郡家では館や政庁のようなところで官人を迎えたり、送ったりする、そういう饗宴の場がやがて都であれば摂政関白の私邸に政治の場が移っていきますし、国府においても、大きな儀礼の空間であった政庁から、国司の個人的な館が一つの政治の場に変化していくのです。そして国府の様々な業務も分割されていくのです。国厨で揃えたような宴会というようなものが次第に消えていく。また、郡の中においても、最近新しい遺跡が見つかってきましたが、9世紀後半から10世紀にかけては、それまで古墳時代から伝統的に受け継いできた郡家が、国衙の勢

力によって徐々に解体されて、新興勢力が土地を開発しそれを中央の大きな寺社や有力な貴族に寄進し、地方での支配を強めていくという形が出来てきた。そして彼らは郡家ではなくて、独立した空間に川そして船着き場を設けて、大きな建物を建てて自分の館という形で、後の中世の武士の館に近いものが形成された。最近発見された山形県米沢市古志田東遺跡や新潟県三島郡和島村門新遺跡は新しいタイプの拠点である。一つの郡内にそういう拠点がいくつか出てくる。そうするとかつてのように国司を郡家の館で迎えたり、あるいは郡家のなかで様々な祭祀をするといったときに書かれた墨書土器も消える。そして、なによりも使っている土器が、平泉の土器で象徴されるように、かわらけというかたちで、目方で計った方がいいくらいの多量の土器を使うようになります。これは、平泉の藤原氏の柳御所跡では12世紀ごろの約3万㎡の範囲から15トン以上のかかわらけが出土しているようで、これは大小あわせると大体10万枚以上になるという素焼きの、全く使い捨ての土器のようです。そういう面でこの“ハレ”の場で使われるかわらけというのは使い捨てというふうになったとき、いちいち墨書するような丁寧な作業もやがて消えていくという。結局のところ集落においても官衙においてもやはり古代的な饗応の場というものが退いていくことによって墨書土器の使命というものはほぼ終わったと思われ、一応それをもって墨書土器の終焉、大きく社会が変わっていくことによって墨書土器もその役割を終えたというふうには考えております。この結論についてはまったく私自信の最新の見解ですので、今後いろいろと検討していただきたいと思っております。以上です。

司会

どうもありがとうございました。千葉県で墨書土器の研究が始められ、昭和52年に県立房総風土記の丘で「文字は語る」という企画展が行われました。それからすでに20数年がたっておりだいたい県内の墨書土器の様相といいますか、その状況が次第にわかってきております。本日のフォーラムも決して結論的なことを出すものではなくて、今日のフォーラムから新たな墨書土器の研究を進めていかなければならないのではないかというような感想を持っております。

本日は1時から、すでに5時を過ぎましたけれども、長時間にわたりましてご静聴いただきましてどうもありがとうございました。

4. 参考文献 (○印は展示資料, □は図録掲載資料)

- 1. 1934 小熊吉蔵 「君津市中郷村大寺廃寺址考」『房総郷土研究 1-10』
2. 1937 篠崎四郎 「上総国真里谷廃寺址」『考古学雑誌27-10』
3. 1957 『萬葉集 4』岩波日本古典文学大系 7
4. 1957 「舊大禰宜家文書・大禰宜家眞平讓状」『千葉県史料 中世篇香取文書』千葉県
5. 1958 伊東すみ子「奈良時代の婚姻についての一考察 1」『国家学会雑誌72-5』
6. 1959 伊東すみ子「奈良時代の婚姻についての一考察 2」『国家学会雑誌73-1』
- 7. 1967 『日本霊異記』 岩波日本古典文学大系 70
- 8. 1969 「藤原宮」-奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第25冊-奈良県教育委員会
- ☑ 9. 1969 奈良国立文化財研究所「平城宮木簡 1」
- ☑ 10. 1969 丸子 亘 「新発見の『山邊郡印』をめぐって」『古代文化21-4』
11. 1970 「出雲国庁跡発掘調査概報」松江市教育委員会
- 12. 1974 「下総国分の遺跡」和洋女子大学
13. 1974 「大塚前遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II』千葉県都市公社
- 14. 1977 『続日本記』後篇(新訂増補国史大系)
- 15. 1977 『日本三代実録』後篇(新訂増補国史大系)
16. 1977 「千葉県萩ノ原遺跡」日本文化財研究所
17. 1977 「文字は語る」千葉県立房総風土記の丘
- 18. 1978 松嶋順正編『正倉院御物銘文集成』
- ☑ 19. 1978 「城山第一号前方後円墳」小見川町教育委員会
20. 1978 「因幡国府遺跡発掘調査報告書V」鳥取県教育委員会
- ☑ 21. 1979 「新木東台遺跡」我孫子市教育委員会
22. 1980 「我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書」(財)千葉県文化財センター
23. 1980 「佐原市長部山遺跡」長部山遺跡発掘調査会
- 24. 1980 「埼玉稲荷山古墳」埼玉県教育委員会
- ☑ 25. 1980 「印内台」印内台遺跡調査団
- 26. 1980 「江田船山古墳」菊水町
- ☑ 27. 1981 「加良部遺跡・中台遺跡」『公津原II』(財)千葉県文化財センター
28. 1981 「下野国府跡III」栃木県教育委員会
29. 1982 西山良平 「「郡雑任」の機能と性格」『日本

- 史研究234]
30. 1983 『東北新幹線関連遺跡掘調査報告Ⅳ 御山千軒遺跡』(財)福島県文化センター
31. 1984 竹内理三編『角川地名大辞典12』千葉県 角川書店
- ☑ 32. 1984 『八千代市権現後遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 33. 1984 『羽黒前遺跡』我孫子市教育委員会
- 34. 1984 『羽黒前遺跡第1次発掘調査概報』我孫子市教育委員会
- ☑ 35. 1984 「新林遺跡」『大網山田台遺跡』大網山田台遺跡調査会
- ☑ 36. 1984 「花前Ⅰ遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』(財)千葉県文化財センター
37. 1984 『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告書』千葉県教育委員会
38. 1985 佐野光一編『木簡字典』雄山閣出版
39. 1985 大竹憲治 「関東地方出土の墨書人面土器小考」『史館18』
40. 1985 「大畑Ⅰ遺跡」『主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- ☑ 41. 1985 『八千代市北海道遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 42. 1985 『門脇遺跡』(財)千葉県文化財センター
- ☑ 43. 1985 『成東町真行寺廃寺跡発掘調査報告』成東町教育委員会
- ☑ 44. 1985 「花前Ⅱ-1遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』(財)千葉県文化財センター
45. 1985 須田 勉 「平安時代初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢Ⅱ』
46. 1985 『下野国府跡Ⅵ』栃木県教育委員会
- 47. 1985 「油作第2遺跡」『平賀』平賀遺跡群発掘調査会
48. 1985 『君津市九十九坊廃寺址調査報告』(財)千葉県文化財センター
49. 1985 『神野向遺跡Ⅴ』鹿島町教育委員会
- 50. 1986 『下総国分尼寺跡Ⅳ』市川市教育委員会
- 51. 1986 『坂戸遺跡』佐倉市坂戸遺跡調査会
- 52. 1986 『六拾部遺跡発掘調査報告書』佐倉市教育委員会
- 53. 1986 「柳台遺跡」『飯塚遺跡群発掘調査報告書』八日市場市教育委員会
- ☑ 54. 1986 『滝東台遺跡 油井古塚原遺跡』(財)山武郡市文化財センター
- ☑ 55. 1986 『千葉県大網白里町南麦台遺跡』(財)山武郡市文化財センター
56. 1986 『千葉市小食土廃寺跡確認調査報告書』千葉県教育委員会
57. 1986 『東郷台遺跡』(財)君津郡市文化財センター
58. 1986 東野治之 「木簡雑識」『長岡京古文化論叢』所収
- ☑ 59. 1987 「大嶋郷戸籍・倉麻郡戸籍・針托郡戸籍・安房国義倉帳」『大日本古文書』巻之一
- 60. 1987 『市原市郡本遺跡』(財)市原市文化財センター
61. 1987 『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会
- ☑ 62. 1987 『長熊廃寺跡』(財)千葉県文化財センター
- ☑ 63. 1987 『作畑遺跡』山武考古学研究所
64. 1987 樋口知志 「律令的地方官衙における計帳の勘造」『歴史65』
- 65. 1987 『八千代市井戸向遺跡』(財)千葉県文化財センター
- ☑ 66. 1988 滝口宏監修『「王賜」銘鉄剣』吉川弘文館
- ☑ 67. 1988 『久能遺跡群発掘調査報告書』(財)印旛郡市文化財センター
- 68. 1988 『八日市場市平木遺跡』(財)千葉県文化財センター
- ☑ 69. 1988 『佐原市神田台遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 70. 1988 「東野遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』(財)千葉県文化財センター
- ☑ 71. 1988 『東金市久我台遺跡』(財)千葉県文化財センター
- ☑ 72. 1988 「小座ふちき遺跡」『東総用水』(財)千葉県文化財センター
73. 1988 『熊野田遺跡発掘調査報告書』山形県・山形県教育委員会
74. 1988 『神野向遺跡Ⅵ』鹿島町教育委員会
75. 1989 平川 南 「地方官衙における文書の作成・保存・廃棄」『漆紙文書の研究』所収
76. 1989 平川 南, 天野努, 黒田正典「古代集落と墨書土器」『国立歴史民俗博物館研究報告22』
77. 1989 『浄水寺墨書史料』石川県埋蔵文化財センター
78. 1989 『熊野田遺跡第三次発掘調査報告書』山形県・山形県教育委員会
79. 1989 『閻魔登場』川崎市市民ミュージアム
80. 1989 今鷹真・井波津子訳『三国志』世界古典文学全

81. 1989 『吉田川西遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター
82. 1989 「妙見堂遺跡」『織幡地区遺跡群発掘調査報告書』小見川町埋蔵文化財調査会
83. 1990 「上吉田遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告9』(財)福島県文化センター
84. 1990 『下神遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター
- ◎ 85. 1990 「庄作遺跡」『小原子遺跡群』小原子遺跡群調査会
- ◎ 86. 1990 『長勝寺脇館跡』(財)印旛郡市文化財センター
- ◎ 87. 1990 『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書V 吉原三王遺跡』(財)千葉県文化財センター
88. 1990 『印内台遺跡第7次・8次調査報告書』船橋市遺跡調査会
- 89. 1990 『山垣遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
90. 1991 平川 南 「墨書土器とその字形—古代村落における文字の実相—」『国立歴史民俗博物館研究報告35』
91. 1991 『長部山遺跡』(財)香取郡市文化財センター
- ◎ 92. 1991 『八千代市白幡前遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 93. 1991 「一夜山遺跡・多田日向遺跡」『事業報告I』(財)香取郡市文化財センター
- 94. 1991 『多古町南借当遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 95. 1991 『千葉市種ヶ谷津遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 96. 1991 奈良国立文化財研究所編『長屋王邸宅と木簡』
97. 1991 『房総における奈良・平安時代の出土文字資料』房総歴史考古学研究会
98. 1991 『印内台遺跡第4次調査報告書』船橋市教育委員会
- ◎ 99. 1992 『千葉中央ゴルフ場遺跡群発掘調査報告書 中鹿子第2遺跡』(財)千葉市文化財調査協会
100. 1992 南部 昇 『日本古代戸籍の研究』
101. 1992 平川 南 「律令制と東国」『新版 古代の日本8』関東 所収
102. 1992 『御座ノ内遺跡』(財)香取郡市文化財センター
- 103. 1993 原田享二 「「下総国鉦托郡少幡郷」についての覚書 —古屋敷遺跡出土土器墨書「山幡」をめぐって—」『大根博物館研究報告5』
- 104. 1993 天野 努他「出土文字資料と地名—草刈遺跡—」『千葉県史研究2』
105. 1993 『平成元年度船橋市内遺跡群発掘調査報告書』船橋市教育委員会
- 106. 1993 「古屋敷遺跡」『事業報告II』(財)香取郡市文化財センター
107. 1993 『房総考古学ライブラリー7』歴史時代(1)(財)千葉県文化財センター
- ◎ 108. 1993 「高岡大山遺跡」『千葉県佐倉市高岡遺跡群III』(財)印旛郡市文化財センター
109. 1993 「稲荷前A遺跡」『山王B・稲荷前A遺跡他』平塚市教育委員会
- ◎ 110. 1994 『佐倉市六拾部遺跡』(財)千葉県文化財センター
- ◎ 111. 1994 『千葉県大網白里町砂田中台遺跡』(財)山武郡市文化財センター
- ◎ 112. 1994 郷堀英司 「鳴神山遺跡群出土の文字資料」『研究連絡誌40』(財)千葉県文化財センター
- 113. 1994 『海上町岩井安町遺跡』(財)千葉県文化財センター
114. 1994 笹生 衛 「古代仏教信仰の一側面—房総における8・9世紀の事例を中心に—」『古代文化46-12』
115. 1994 鈴木景二 「都鄙間交通と在地秩序—奈良・平安時代初期の仏教を素材として」『日本史研究378』
116. 1994 「大野第7遺跡」『土気緑の森工業団地内発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター
117. 1995 蔵中 進 『則天文字の研究』翰林書房
- 118. 1995 『下総国分寺』市市川考古博物館
- ◎ 119. 1995 『墨木戸』(財)印旛郡市文化財センター
- 120. 1995 『海上町岩井安町遺跡』(財)東総文化財センター
121. 1995 加藤友康 「上総藻原荘について—「施入帳」の検討を中心として—」『千葉県史研究3』
- 122. 1995 『狐塚遺跡発掘調査報告書』(財)君津郡市文化財センター
123. 1995 『和島村埋蔵文化財調査報告書4』和島村教育委員会
124. 1996 小笠原長和監修『日本歴史地名大系12』千葉県の地名 平凡社
125. 1996 平川 南 「“古代人の死”と墨書土器」『国立歴史民俗博物館研究報告68』
126. 1996 田形孝一 「集落から村落へ(1)」『研究連絡誌47』(財)千葉県文化財センター

127. 1996 「鐘つき堂遺跡」『土気南遺跡群Ⅶ』(財)千葉市文化財調査協会
128. 1996 「達中久保遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告39』(財)福島県文化センター
- 129. 1996 「駒込第Ⅱ遺跡」『事業報告Ⅴ』(財)香取郡市文化財センター
- 130. 1996 「猪ヶ崎遺跡」『大網山田台遺跡群Ⅲ』(財)山武郡市文化財センター
- ☑ 131. 1996 「久野遺跡」『千葉県文化財センター年報21』(財)千葉県文化財センター
- 132. 1996 「池尻遺跡」『主要地方道多古笹本線埋蔵文化財調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- 133. 1996 『荒田目条里遺跡木簡調査略報 木簡が語る古代のいわき』いわき市教育委員会
134. 1996 阪田正一 「古代房総の民衆と仏教」『坂詰秀一先生還暦記念 考古学の諸相』所収
135. 1996 『千葉県の歴史』資料編 古代 (財)千葉県史料研究財団
136. 1996 『和島村埋蔵文化財調査報告書5』和島村教育委員会
137. 1999 大町 健 「律令制的国司・郡司制の特質」『成蹊大学経済学部論集28-1』
138. 1997 田形孝一 「下総国印旛郡船穂郷の歴史景観」『千葉史学31』
- 139. 1997 『古代の碑—石に刻まれたメッセージ—』国立歴史民俗博物館
- ☑ 140. 1997 『新橋高松遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- 141. 1997 「小西平台遺跡」『大網山田台遺跡群Ⅳ』(財)山武郡市文化財センター
- 142. 1997 「貝蔵遺跡」『月刊 文化財発掘出土情報182』ジャパン通信情報センター
143. 1997 藤沢市教育委員会編『墨書・刻書資料』
- ☑ 144. 1998 「西原遺跡」『君津郡市文化財センター年報15』(財)君津郡市文化財センター
145. 1998 『企画展 地名・文字・記号』(財)印旛郡市文化財センター
- ☑ 146. 1998 「大袋腰巻遺跡」『公津東遺跡群Ⅲ』(財)印旛郡市文化財センター
- ☑ 147. 1998 『南囲護台遺跡(第2地点)』(財)印旛郡市文化財センター
- ☑ 148. 1998 「塚越遺跡」『富里第二工業団地土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』(財)印旛郡市文化財センター
- ☑ 149. 1998 「夏台遺跡・神山谷遺跡」『東総文化財センター年報3』(財)東総文化財センター
- 150. 1998 安藤杜夫 「富山町恩田原遺跡」『平成9年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』
- 151. 1998 『千潟工業団地埋蔵文化財調査報告書 桜井平遺跡』(財)千葉県文化財センター
152. 1998 『第3回特別展 仏のすまう空間—古代霞ヶ浦の仏教信仰—』上高津貝塚ふるさと歴史の広場
153. 1998 『研究紀要18 古代仏教遺跡の諸問題』(財)千葉県文化財センター
154. 1998 『千葉県の歴史 資料編 考古3』(奈良・平安時代) 千葉県
- 155. 1998 「根塚遺跡」『月刊 文化財発掘出土情報198』ジャパン通信情報センター
156. 1998 渋谷健司 「佐倉市八木山ノ田遺跡」『平成8年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』
- 157. 1998 『椿井大塚山古墳発掘調査報告書』山城町役場
- ☑ 158. 1998 『龍角寺五斗蒔瓦窯跡』(財)印旛郡市文化財センター
159. 1998 「遠寺原遺跡」『永吉台遺跡群』(財)君津郡市文化財センター
- 160. 1998 シンポジウム『古代日本の文字資料』大修館書店
- ☑ 161. 1999 辻 史郎 「「意布郷久須波良部」の墨書土器」『日本歴史615』
- ☑ 162. 1999 阿部寿彦 「幡谷宮谷第1遺跡」『第3回遺跡発表会発表要旨』(財)印旛郡市文化財センター
- 163. 1999 「多田日向遺跡」『加止里5』(財)香取郡市文化財センター
- ☑ 164. 1999 「馬込遺跡」『千葉県文化財センター年報23』(財)千葉県文化財センター
165. 1999 蕨 茂美 「八千代市上谷遺跡」『平成10年度遺跡調査研究発表会発表要旨』
- ☑ 166. 1999 「印西市鳴神山遺跡」『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』(財)千葉県文化財センター
- ☑ 167. 1999 市原市文化財センター編『史跡上総国分寺跡』市原市教育委員会
168. 1999 鐘江宏之 「律令国家と国郡行政」『歴史学研究729』
169. 1999 米沢市教育委員会 「古志田東遺跡発掘調査現地説明会資料』